
参拝の旅

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

参拝の旅

【Nコード】

N4993Z

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

西京の学舎の生徒である浄瑠璃は、一見勉学と恋に悩む普通の女生徒だった。今年は忌まわしき阿高山の参拝があり、八人の成員を決める話で学舎内は不安に包まれていた。そんなとき、浄瑠璃と友人の葵が成員の中に加わるということが決定された。絶望する浄瑠璃だが、成員の中には浄瑠璃の思い人がいた。かくして、八人の参拝の旅が始まった

登場人物紹介

阿高山参拝人達

- 燈籠 西条家の三男。三学年。参拝者達を率いる
浄瑠璃 西京の生徒で三学年。燈籠を慕う少女。
葵 二学年。浄瑠璃の学舎仲間。武道に秀でる
百合桜 二学年。浄瑠璃と同じ組。魔術に長けた才女
夏彦 三学年。燈籠と同じ組
八桐 四学年。女に手が早い
音桂 四学年。弓に長ける冷静な生徒
初雁 二学年。小柄で大人しい男子。雑学が豊富
霧窪 富嶽学舎の生徒で燈籠の友人。

西京学舎の者達

- 陽炎 浄瑠璃と同じ組のお調子者の女子。成績は悪い
葉摩子 浄瑠璃と同じ組の親分肌の一人
弓近 浄瑠璃と同じ組の不良的なもう一人の親分肌

物語に出てくる水晶玉の首飾り等は通話機能と時計の役割があります。水晶玉の色によって時間がわかります。色相環の円を時計に見立てており、青紫が六時。赤が九時。黄色が十二時。三時が青緑となっています。午前午後は光の輝きによってわかるようになって

おり、午後のほうが輝きが強まります。また時刻の表し方は辰刻を
使っており、零時から時計回りに子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥となっ
ています。一つの刻が二時間あります。

序

浄瑠璃は首飾りを持ち上げ、水晶玉を眺めた。水晶を擦りながら念じるとすぐに葵の顔が見えた。少し映りが悪いのは何故だろうか。葵は階下にいるだけなのに。葵がこちらに向かって何か喋っているが、全く聞こえない。どうも磁界が乱れているようだ。顔を顰めて玉を下ろした。教室に戻るしかない諦め、戻ると室内は何人かの生徒で賑わっていた。一人でいる生徒も水晶玉を使って通話をしている。窓の近くに座っている女生徒、雛菊は最近恋人ができたようにいつも通話している。席につき、とりあえず机の中から書物を取り出し、捲った。勉強こそ生徒の本分。周りの喋り声が邪魔をして集中できないけど、あともう少しだ。時刻はすでに遅い。もう少しで寮に帰れる。ちらりと外を見る。窓の外は暗く、たなびく雲の中に隠れた月が朧に光っていた。

教師が入ってきた。退屈極まりない授業が始まる。そう思ったのは浄瑠璃ではなく、この教室にいる大多数がそうだった。

「さあ、授業を始めようか。さてさて、席に座りなさい」茶の着物を着た禿げかかった男が言った。男はいかにもどうでもよさそうに本を開き、そして咳をした。これがこの教師の授業を始める前の癖だと言うことは生徒全員が知っていた。

「さて、一昨日の続きをやるう。術の基本を学んだ。さあ、早速百合桜^{ゆしやくわ}、やってくれ」

百合桜は最前列の女生徒で、優秀だったのでこの教師にかなり気に入られていた。百合桜は立ち上がり、凜として淡紅色の振袖の裾をはためかせて前に出た。

「何をすればいいんでしょう？」

「そうだな、幻視の術を使ってくれ。他の生徒たちの全員がわかるようにな」

「わかりました」

百合桜は生徒達のほうを向くと、目を瞑った。浄瑠璃は彼女の術が起こるのを見守った。百合桜の体から炎が躍り出てきた。そしてその炎は生徒を、教室を包み込んだ。何人かの生徒が悲鳴を上げて立ち上がった。教室から逃げようとする生徒もいた。しかし、炎はすぐに消え、生徒はきよとんとした。服や皮膚を見ても焦げ痕すらない。教師は予想通りの反応だといわんばかりに意地の悪い微笑を浮かべていた。浄瑠璃も大多数の生徒と同じように炎の幻視に騙された。

「素晴らしいぞ、百合桜」褒められた百合桜は少し得意げな顔をしながら席についた。「次は陽炎^{かげろう}。体感幻視の術を使え」

体感幻視。眩惑させる術をさらに強め、実際には起こっていないことなのに起こったように感じてしまう。例えば先ほどの百合桜の炎は誰も熱いとは思わなかったし、自分の皮膚が焼けるとも思わない。しかし体感幻視だと実際に熱いと感じ皮膚が焼けたと思ひ込んでしまう。存在する幻、これが体感幻視だった。浄瑠璃も含め生徒たちははどのようにも信じられない思いで一斉に陽炎を見つめた。するとすぐに蜻蛉が体感幻視なぞできるはずがないということが理解できた。蜻蛉は呆けた顔で教師を凝視していた。当然だ。学年で最高の術使い百合桜ですらできない高度な術なのだ。基礎の術すらままならない陽炎が扱えるはずがない。浄瑠璃は少しほっとした。大体そんな危険な術をこんな狭い教室でやるはずがない。

「冗談だ陽炎。そんな顔をするな」教師は意地の悪い笑みを浮かべて言った。周りの生徒の動揺も収まった。「さあ、教科書を開きたまえ」

授業内容は術の基礎を学ぶこと。術という授業は大抵の生徒が基礎で落ちる高度なものだ。術というのは一部の人間のみが扱える高等学問だった。心と体の一体化が必要で、初歩より上の術を扱えるのはこの中でもわずかしかなかった。

退屈な授業は終わり、生徒達は寮棟に向かった。瞬時昇降する者

もいるし、あえて階段を下る者もいる。浄瑠璃は瞬時昇降することにした。五芒星の中心に立つと、星が光りだした。降りる間に勾玉を触った。多種の性能を持つ勾玉だが、浄瑠璃の勾玉は普通の役目を果たさなかった。しかし、握ると不思議と心が穏やかになる気がした。葵はまだ教室にいるだろうか。階下に着くとそのまま廊下を進む。二人の男の生徒とすれ違う。浄瑠璃はその生徒の一人を見る。とすぐに顔を逸らした。そしてそそくさとその場を去った。浄瑠璃はしばらく歩いた後に振り向いたが、もう二人の姿は見えなかった。浄瑠璃は吐息をついた。頭から男子の顔が離れない。華奢にも見える繊細な体つき、端正な顔つき。その目に吸い寄せられそうになる。「浄瑠璃」

気づくと隣に葵が立っていた。

「何してるの？」

「さあね」浄瑠璃はとぼけた。

「何よ？」

「あなたに会いにきたの」

「そう。じゃ、寮に戻ろっか」

二人は階段を下りて、一階にたどり着いた。それから門をくぐり、寮にたどり着く小道を歩いた。少し強く吹く風が心地よい。草むらからは蟋蟀や鈴虫の鳴く声が聞こえてきた。二人の他にも歩いているものがわずかにいたが、恋人同士がほとんどだった。二人は嘆息した。

「ねえ、浄瑠璃。あなたは名家のお嬢さんでしょ。早いところ恋人作らないと、政略結婚に巻き込まれるよ」

「私の家はそんなこと考えてないってば……葵だって、男のあてはあるの？」

葵ははぐらかした。「こんな美人が二人いて、放って置かれるはずないでしょ」

「そうだといけれど」浄瑠璃は先ほどの男子生徒のことを思い、それから女子寮と池を挟んだ場所にある男子寮を見た。あの最上階で

彼は寝ているのだ。いや、まだ寝ていないだろう。今頃男子仲間とお喋りをしているに違いない。

「浄瑠璃？」葵の声に浄瑠璃は思わずはっとなった。最近、少し想い人に対する考え事が多すぎる。

「何？」

「あんたの好きな人は知ってるよ」

「誰のことかしら？」浄瑠璃はとぼけた。

「西条家のお坊ちゃん。名前は……何だっけ」

「燈籠」浄瑠璃は隠すのを諦めた。

葵は微笑を浮かべた。「そうそう、燈籠。西条家の」

「何でわかったの？」

「あのお坊ちゃんが通り過ぎるときに、あなたが向ける熱い眼差しを見れば、ね」

浄瑠璃は少し恥ずかしくなった。そして葵を睨んだ。

「そういう葵はどうなの、誰か好きな人いないの？」

「私はあなたほど家柄がいいわけじゃないし」

葵は珍しく寂しげな表情をし、浄瑠璃は気になった。それから少し早歩きになった。寮につくと二人はしばらく一階でお茶を飲み、談笑した。もう男の話はしなかった。三階にいつて自分の部屋にいくと浄瑠璃は寂しくなった。一人部屋というのは破格の待遇ではある。しかし葵とふたり部屋のほうがいい。いいに決まっている。一人部屋なんて恨まれるだけで、いいことなんてありはしない。

高等学舎にきてもう三年。あと一年でここを出て、誰かの妻となるための準備をしなくてはならない。大抵の修行はもう終えているとはいえ、浄瑠璃はここを出て見知らぬ男達と関りを持つということを考えてくなくかった。

布団に入っても眠れなかった。起き上がり、窓の外を見た。向この男子寮が見える。浄瑠璃はため息をついた。恋焦がれていても、どうにもならないことがある。相手は最上級生だし、それに西条家という家柄だ。舎内で女と一緒にいる気配はないが、許婚もいるだ

ろつ。浄瑠璃はもう一度ため息をついた。それからしばらく窓の外
の夜空の星を見上げた。

序二

万華鏡を見ると心が落ち着く。そういうものだ。燈朧はきらきらと輝く無数の鏡面を眺めた。美しい。星の瞬きのような、美しさ、そして奥深さを感じ、悦に浸る。しかしそろそろ飽きてきた。万華鏡を投げ、寝巻きに着替える。水晶玉が点滅している。赤と黄色と交互に光る。霧窪きりくぼからだ。燈朧の幼なじみであり、学問にも秀で、術にも長けたライバルでもある。霧窪は都に一番近い学舎にいる。そのためか都からの情報が早い。燈朧は水晶玉を手にして顔に近づけて応じた。辺りに微弱な結界が立ち込める。

「どうした？」

「よかった。まだ起きてたか」水晶玉は透明になり、霧窪の顔が浮かんできた。霧窪とは幼馴染で、別の学舎に通っているとはいえまだまだ友情は途絶えていなかった。「実は来週の試練、俺が受けることになったんだ」

「おめでとう」燈朧はついそう口に出した。本当は喜ぶべきことでは全くなかった。

「ちつとも嬉しいことじゃないね」桐窪の声は低かった。「燈朧、君だって不安なんだろう？」

「そりゃあね。不安どころじゃない」

「そうだろうな。こっちもだ」霧窪はいかにも嫌そうな声で言った。

「一体どうなると思う？ 今度の儀式は」

「さっぱりわからない」霧窪の顔が翳っている。おそらく不安になつてこちらに連絡をよこしたのだろうということが、燈朧にはすぐにわかった。長い付き合いだった。

「そっちはわかっているのか？」

「さあ。もしかしたら、死ぬかもしれないということだけしか」

「それはこっちもそうさ。なあ、何で俺達は学生の途中なのに、そ

んな危険な目にあわないといけないんだろっね？」

霧窪の不満はもつともだと思ふ。しかし、そんなことを教師らや朝廷に言う者はいない。忌まわしきものが背後にいるのだから。

「三年前は一人も死ななかつたよ」燈籠は言う。

「四年前は一人死んだんだろ？」

「たまたま、崖に足を滑らせたただけだ」

「魍魎に襲われたから滑つたんじゃないか」

「よく覚えていらっしやる」これから試練の道を進む燈籠にとっては嫌な記録だつた。六年前には二人死んでいる。

十月三日。燈籠は壁紙の日付を確認した。今は九月の二十六日。

もう少しだ。選抜に選ばれたのはある意味で名誉なことなのかもしれない。成功すれば英雄だ。しかしそれでも燈籠は選ばれたくなかつた。霧窪が言つたように、生徒をやっているうちに死ぬのは御免だつた。学び舎を終えたら家に戻り政治のことを学ばねばならない。西条家の人間というだけで政は避けられない。

「覚悟はいいか、霧窪。ところで君が何故選ばれたりしたんだい？」

「何を言っている。僕は富嶽で一番優秀な術士だぜ。そつちこそ、どうして選ばれたのさ」

「随分と自信じゃないか」

「まあね。で、何故君が選ばれたんだい？」

「そりゃあ、西京の成員のうち、誰か一人は賢者がいないといけないからさ。当然だろ？」

「わかつたよ。どつちみちこんなのは無作為に決まるんだろ」霧窪は笑つた。少しは不安が解けたようだ。と燈籠はほつとした。

「燈籠、お互い頑張ろう。それじゃ、また連絡するよ」

「ああ。また」

霧窪の顔は見えなくなり、水晶は光を失い、ただの緑色になつた。そろそろ寝る時刻だ。色々不安だが所詮、やらなければならぬこと。悩んでいても仕方ない。しかし、ただならぬ不安は払拭できなかった。

何か起こる。そんな予感がする。無事に終わればいいが。燈籠は寝巻きに着替え寢床に入った。今宵の月は美しい、と彼は思った。

十月三日の行事、阿高山参拝、あるいは阿高山登り。毎年確実にあるわけではない。陰陽師達が今年は参拝に行かなくてはならないと占つと、決定されるものだった。都の三大学舎である西京、それに富嶽、京帝の各学舎の生徒たちが、東に三十里ほど行ったところにある阿高山を目指す。道は自由ではなく、指定された道を通らねばならない。道のほとんどは山道である。媯山、狼頭山や旧街道を通る。旧街道は現在ほとんど使用されていない状況だった。魍魎の類が出るからだ。狼頭山には狼が多い。そこを越えると天満山の頂上を目指す。そして、これまた使われていない危険な天満山の頂上を渡る。それからいよいよ阿高山に登り、頂上に奉つてある神々の祠にお参りをする。大体行つて帰るまでに一月はかかる苦行である。一つの学舎につき、八人の生徒が選ばれる。選ばれる生徒は教師達の判断ではなく、神々の意思で決まるものとされる。預言者たちのみが神の意思を感じる事ができ、それを学舎長に伝える。八人で行動する、決められた道以外の道を行つてはならない。道は参拝を終えるまで引き返すことはできない。別の学舎の者達と交わつてはならない。参拝者以外の者が助力をしてはいけない。この五つは神々が出した規則であり、厳守せねばならないことだった。命の危険がつきものの、恐ろしいこの儀式を喜ぶ生徒も、その親も、教員もいない。しかし、これらは必ず実行しなくてはならない約束だった。守らなければ、京は滅びるかもしれない。それほど重大な行事であった。三つの学び舎の生徒全二十四名のうち、一人でも阿高山の頂上にたどり着き、祠を参拝できれば凶事は回避できる。しかし、二十四名のうち途中で遁走を試みた者が出れば、その時点で呪いが発動する。しかし一つの成員がもはや続行不能の状態になつたとしても、他の成員が参拝することができれば、それで旅は終わりとなり、その年は成功となる。

もう二十数年以上も続けられているが、最も悲惨な年は死者が十八名でたときで、京学舎の生徒は二名しか残らなかった。死者の多くが天の橋を渡ることなく死んでいった。この年は悲劇の年としてその年に学舎で教員をしていた者たちにとっては忌まわしき過去だった。それ以来、さらなる対策が立てられることとなった。二十四名全員が生きて帰れたこともある。奇跡というわけではなかった。悲劇の年以降、死者の数は激減した。死者の数を全く無くすることが最終目標で、学舎の教員達はその対策も練っていた。誰もが安心して学べる学び舎にしたい、それが彼らの願いであり目的だった。しかし悪霊がそれを許さなかった。

参拝人決定

浄瑠璃は機嫌が悪かった。また術の試験で失敗したのだ。そしてまた百合桜が見事な術を披露した。百合桜は悪い人間ではない。才女ではあるが、浄瑠璃にも気さくに接する。誰もが認める美人でもある。浄瑠璃は百合桜に対して半ば嫉妬のような感情を抱いていたが、敵う相手ではないと諦めていた。なんといっても浄瑠璃と百合桜の術とでは大人と子供ほどの差があった。

「今回は蜻蛉が最悪だな。いつものことではあるが」教師が呆れ顔で言う。

「私は術よりも学問に向いているようです」組でも最低の成績の蜻蛉はしれっとした顔でそう返した。忍び笑いがおこる。

「馬鹿なことを、もつと努力しないといかん。こんな時期だからな……言いたいことはわかるな？ 脅すわけではないんだが。まだ成員が半分、揃っていない。この中の誰かがなるかもしれない。私にそれを止める術はない」

室内は静かになった。誰かの椅子の軋む音がやけに目立った。教師はため息をついた。太った中年の教師は口ひげを搔くと同情を含まむ目で筆子たちを見つめた。

「すまない。こんなことをいうつもりはなかったんだ。しかしな、私は君たち健全な若者が、本人の意思など全く無意味な、凄絶な旅に出ると思うとな……自分の身は自分で守らんといかんわけだ。体を癒す術、相手を撃退する術、全ての術が役に立つはずだ」

「でも、あと一週間もないじゃないですか」蜻蛉が言った。
「何もやらないよりましだ。お前はせめて初級術の一つでも使えるようになることだ。みんなもそうだ。初級ができるものは中級、中級ができる者は上級。術が全然駄目だというものはせめて頭と体を磨いておくことだ。もう一度いう。誰が選ばれるのかわからん。そのことをしっかり頭に刻んでおけよ！」そう言うとき彼はまだ授業の

終了時刻でもないのに教室を出て行った。

「あいつがいけばいいのに」そう呟いたのは咲苗さなえだったが、誰もそれに賛同するような笑いを返さなかった。

「それで、今からどうすればいいの？」雛菊が水晶玉を宝物を眺めるかのように見つめながら言った。

あなたは男と喋ってなさいよ。浄瑠璃は苛立つ。

「先生の言ったとおりによければいいんじゃない？ 術の」葉摩子はましが言った。この教室の親分的存在は真面目な葉摩子、そして反対の性格をした弓近ゆみちかの二人がそうだ。

「先生もないし、貝合わせでもやればいいんじゃない。それが賭け双六とか」机の上に太ももまでめくり上げた両足を乗せた弓近が言う。廊下を通り過ぎる男子生徒に見やすいようにという配慮だったが、それは功を奏していた。

葉摩子の意見に賛同した者は百合桜の周りに群がり、術を教えてほしいとせがんだ。弓近と似た性質の者は賭け双六をやり始めた。浄瑠璃も術を学ぶことにした。百合桜に頼ろうとはせず、術書を読んで独学した。そして授業が終わると、即座に葵の元に向かった。廊下では阿高山巡りの話がちらほらと飛び交っている。すでに四人決定しているが、その決定した人間が誰なのか他の生徒には知られていなかった。

水晶玉がゆつくりと点滅を繰り返していることに気づき、浄瑠璃は水晶玉を顔に近づけた。副学長の顔が見えた。副学長は高齢の女性で、厳しいことで評判だった。飴と鞭を使いこなせる教師だった。副学長の声ははっきりと聞こえた。しかし、浄瑠璃以外の者の耳には届かない。

「すぐに指導室へきてください。大事な話があります」副学長の顔は真剣だった。

「わかりました」浄瑠璃は何だろうと思いつつながら葵に会いに行くのをやめ、職員室へ向かった。階段を下りるとき、百合桜が瞬時昇降するのが眼に入った。下に下りて、廊下を歩き、指導室の前に立つ。

用事が何なのかわからないが、指導室に入るときはいつも緊張した。反対側から百合桜がやってくる。通り過ぎるかと思っただが、百合桜も指導室の前で立ち止まった。

「あなたも指導室に用なの？」百合桜が言う。

「ええ。あなたも？」

「そう見たい。何なのかしらね」百合桜が扉を開いて中に入る。浄瑠璃も続いた。指導室の中には教師が大勢いて、机に向かって業務に勤しんでいるものだ。しかし今は副学長と、学長、それに担任の教師と葵の教室の担任の教師がいるだけだった。いや、生徒が一人いる。その生徒が浄瑠璃のほうを向いた。それは葵だった。

「浄瑠璃」葵は驚いた顔をする。

「葵」浄瑠璃も呟くように返す。ひどく心がざわついた。嫌な予感。何だろう？

「さて、三人揃ったようだな……では、そこに腰掛けてください」学長が言った。大柄で五十二歳という副学長より若い学長は、若い頃に武士として名を馳せたことがあった。また、術にも定評があり、危険な仕事を転々とした後に、三十代で教職になり、教師として尽力した。隣にいる鬼の副学長は神妙な顔をしている。

一体何が始まるのだろうかと浄瑠璃は思いながらも用意されてある三つの席に腰掛けた。

副学長はため息をつき、言った。「先ほど預言者たちから連絡が入りました。阿高山参拝の成員に、あなた方三人を加えるようにとのことです」

三人は凍りついた。

「非常に、遺憾なことですが……しかし、これは名誉なことでもある」学長が厳かに言う。

「拒否する権利はあなた方にはありません。しかし、我々はあなた方が安全に参拝を終えるために十分な配慮をする。安心して下さい」
「ただし、万が一ということもあります」と副学長。「参拝者以外の助力を行ってはならないというのが原則です。道には魔物も潜ん

でいることでしょう。自分の身は自分で守らねばなりません。あなた方はか弱い女性であります。男衆に守ってもらおうと考えるはなりません。よいですか、女も男も、努力すれば術は同じ強さを持てます。そこを活かすことです」

「副学長、確かに百合桜は術の扱いに長けています。今学年で最高の術士でしょう。二組の葵も武術に秀でています。おそらくほとんどの男子生徒は葵の前にひれ伏す位です。しかし、浄瑠璃はそういった戦いの術は得意ではありません」浄瑠璃は担任、背の高い若い教師が言った。熱心な教師で女生徒に人気がある。

浄瑠璃きには教師の言葉にも全く気づかなかった。阿高山参拝に選ばれた、という衝撃的な事実で頭が一杯だった。

「だからといって、参拝人を変更することなどできないのです。各々が自分にあつたやり方で自衛をするしかないのです」副学長が言う。

「浄瑠璃は弓が得意では？」百合桜が言った。前に弓の授業で、たまたま矢が的に当たったということがあった。浄瑠璃は百合桜の声など耳に入っていなかった。

「いや、浄瑠璃は武芸全般駄目だ」浄瑠璃の担任は断言した。

一同が浄瑠璃を見たが、浄瑠璃は衝撃が深く、彼らがいることすら忘れていた。

「まだあと一人誰になるのか決まってる。全員が揃ったら、改めて集合しましょう。そこで、具体的な話をします。それではひとまず解散してください」学長が言い、そこで解散となった。

「浄瑠璃、あんた大丈夫？」指導室から出て、廊下を歩きながら葵が聞いてくる。

「大丈夫じゃない。葵こそどうなの？」

「うん……大丈夫なわけないよね」葵は俯いた。葵もいつもよりずっと元気がなかった。「こんな若さで死ぬかもしれないのに、大丈夫なわけない」

浄瑠璃ははつとした。死。そう、この旅は死の危険性がある。た

とえ一人しか死ななくても、二十四分の一の確率で死ぬのだ。

「参拝なんて行きたくない！」浄瑠璃はつい叫んだ。

「静かにしてよ！」葵は慌てた。周りの生徒の耳に入ったらまずい。「あたしだって、死にたくはないよ。だけど、それほど危険な旅だつてことだよ。六年前は、五人死んでるんだから。ばらつきはあるけど、死ぬ可能性は多分にある旅なんだから」

浄瑠璃たちは黙った。慌てても仕方ない。逃亡を図ることはできるかもしれない。しかし、そうなると京は滅ぶのだ。

「呪いなんて、陰陽師たちが何とかすればいいのに」浄瑠璃が呟く。「京で一番の陰陽師だつて手の施しようがない呪いなんだから、仕方ないよ」

学長も、副学長も、力の強い術士だ。浄瑠璃は思った。しかし、いざとなると何の力にもならない。彼らは旅立で、とこちらを押すことしかしない。

「こんなことなら、こんなところにこなければよかった」浄瑠璃は呟く。

「同感」葵は軽いため息をついた。

二人はとぼとぼと教室に戻った。ふと、後ろから誰かがつけてくるのに葵は気づいた。彼女は素早く背後を向いた。少し離れたところに一人の男子生徒がいた。

「あなた、あたし達のことつけてたでしょ？」葵が言う。

「俺だけじゃないよ」嘘をついても見破るだろう。葵の眼力は何者も逃さない。男子生徒はあっさり認めれた。「仕方ないだろ。お前は選ばれたんだから。もし万が一にでも逃げてみる？ また新たな人選をすることになる。陰陽師たちが啓示を受けるのに苦労するつてわけだ」

「まさか寮の中にも入ってくる気じゃないでしょうね？」

「外で、交代で見張りさ。ま、仕方ない。誰も責められない問題だ。君たちだって逆の立場ならそう思うはずだよ」

「ばかばかしい。参拝の旅を逃げたらどうなるかはわかっているの

に」

「まあ、そりゃそうだけどさ。だけどそう命じられてるから。勘弁してくれよ。京全体の問題なんだぜ？」

「あっそう」葵はうんざりした。できるだけ意識しないよう、そのまま歩き出す。

「悪いね」男はいい、距離を保って二人についてきた。

仕方のないことなのかもしれないが、男に背後を監視されるといふのは凄く嫌なものだと浄瑠璃は思った。浄瑠璃はちらっと男を振り返った。男の顔つきは真剣そのもので、浄瑠璃と目が合うとすぐに逸らした。相手も不本意なのだろうが、それでも嫌だった。浄瑠璃は不快感を無くすために燈籠の顔を思う浮かべた。燈籠のことを考えると少し気分が晴れるが、生きて帰ろうと二ヶ月ほど姿を見ることはないのだ。そう考えると心は沈んだ。もう二度と見ることも適わない、という可能性もあった。

参拝人決定 二

燈籠は成員のことを逐一友人の夏彦かひこから聞かされていた。今日一人判明した。また一人だ、と。夏彦自身も参拝の成員である。それから今日は三人だ、と。

「誰と誰と誰だ？」燈籠は教室でうなだれていた。参拝のことを考えると心が沈む。そんなとき、隣の組の夏彦がやってきたのだ。

「ええと……」夏彦は紙の切れ端を見た。「百合桜、葵、それから浄瑠璃だ。三人とも二学年だ」

「百合桜って学舎最高の術士だろ？ 天才って噂の」燈籠は喜んだ。これはついている。「葵といえば武芸に達者で、舞いも上手いって評判の美人だな。浄瑠璃って子は知らないな」

「でもさ、三人とも美人だったぜ。俺は葵って娘が気に入ったよ。気が強そうな感じであ。お前も気に入ると思う。浄瑠璃って娘も大人しそうだけど、可愛いかったな。だけど二人とも術は使えないって話だ」

「そうか」こんなときに誰が美人かなど、気楽なものだと燈籠は呆れる。しかし、学舎きつての天才術士が一緒とは、心強い。

「これで残るはあと一人ってわけ」

「ま、そのうち決まるだろう。しかしお笑いだな。選ばれた者は百合桜を除いてほとんど全員が術については全くの落ちこぼれなんだから」

あと三日。これまで剣術を必死にやってきたが、術だけはどうしても初級以上の水準から上がらなかった。根っからの剣士だと燈籠は自分のことを思っていた。横にいる夏彦もそうだ。夏彦は恐れ知らずではある。野盗にでも襲われたらそこそそ役にたつかもしい。剣の腕は燈籠以上だ。

あと三日では何をして、所詮無駄な努力。もはや覚悟を決めるしかない。優秀な術士が仲間にいるのなら心強い。

窓の外を見る。夜の帳が降りていて、真つ暗だ。時刻も遅い。他の生徒はもう誰も残っていないようだ。二人も、そろそろ寮に戻ることにした。燈籠は立ち上がり、教室を出た。瞬時昇降し、一階から外に出る。今夜は星一つ出ていない。月も隠れている闇夜だった。寮に戻る歩道を進む。夏彦もついてきている。ここは木々が生い茂る公園になっており、恋人達がよく利用していた。どこかで、かすかに女の喘ぎ声が聞こえてきた。

「誰だ？」夏彦が興味津々といった様子で下卑たにやけた顔を浮かべながら辺りを見回した。

声が止んだ。暗がりから誰かが顔を出した。

「燈籠と夏彦か」男の声がある。男は上半身裸で、茂みでよく見えないが、下半身も裸だった。陰毛がちらちらと見え隠れしている。男はにやけた顔をしていた。髪は長く、肩まであった。筋肉質な体は黒く焼けていた。

「八桐先輩かよ」夏彦が言う。

着物で前を隠した女が出てきた。女は鬱陶しそうな顔で燈籠たちを見つめた。

「なあ、もう少しで終わるから、あっちにいつてくれないか」八桐が言う。

「教師に見つからないようにしたほうがいいですよ」夏彦が笑って忠告する。

二人が歩いていくと、また女の喘ぎ声が聞こえてきた。

「あんなところでもよくやるよ」燈籠は呆れた。八桐は一つ上の学年だが、女癖が悪いと評判だ。顔は野生的で強引な性格をしており、毎晩のように女をとつかえひっかえしているらしい。

「あいつは馬鹿なんだ。それだけさ」夏彦が返す。

燈籠はふと思い出して、愕然とした。

「あいつって、八桐って、参拝の成員の一人じゃなかったか？」

「そつえば……」

「あんな奴と一緒になのか……不安になってきた」

「いざとなれば役に立つ奴だと思つよ。心配するなつて」
しかし燈籠は夏彦ほど樂觀的にはなれなかった。

二人は風呂に入った後にそれぞれの部屋に戻った。自分の部屋に戻ると燈籠は寝巻きに着替えて、水晶で霧窪を呼んだ。すぐに霧窪の姿が浮かんでくる。

「燈籠、遅かつたな」

「悪かつた」

「そつちの成員は全部決まつたかい？」

「七人は決まつた。あと一人だけだ。そうそう、百合桜が成員の中に入る」

「本当か！」霧窪が大声で言う。

「やっぱりそつちでも有名なのか？」

「いや……」霧窪は苦笑した。「燈籠、君たちの学舎は俺の学舎よりも上なんだ。その中でも最高峰の術士と呼ばれているのが百合桜つていう女生徒、ということを知ってる。噂だけ。すごいじゃないか。ちよつと、作為的な気もするけど」

「まさか。できるはずがない」

「確かに。陰陽師が啓示を受けて選ぶんだ。勝手な人選は禁止されているからね」

「そつちはどうだ？ 何かいい事あつたか？」

「全然さ。参拝仲間も頼りにならない連中ばかり。俺一人が頑張る破目になりそうだよ」

「それだけ言えれば大したもんだな」

「いやあ。そつちの天才様に全て任せることになりそうだ」

「噂以上の実力であればいいけど」

「期待していいと思うよ」

「そうか……霧窪、そつちと連絡を取るのも、今日で最後にしようと思う。参拝が終わるまで」

「うん。わかつた。俺もそのほうがいいと思う。あと少ししかないんだ。集中していたいなんだな？」

「そうだ。なんだかんだいってどうしようもなく不安みたいだから」
「それは俺だつて同じだよ。みんな怖がってる」

「うん。それじゃ、また、全てが終わったら」

「ああ。じゃ、しばらくお別れだ」霧窪が言う。

「旅の途中でお前達と会つても、俺は挨拶しないからな」

「そりゃあそうだ。どのみち道が違うから、君と会うことはないけど」

「さよならだ。しばしの間」

「さよなら」

水晶玉から霧窪の姿が消えた。寂しさがこみ上げてくる。それは、別に二ヶ月以上霧窪と会話ができないからというわけじゃない。次にお互いが確実に会話できる、という保障がないからだ。おそらく、霧窪も水晶玉を見つめながら、同じ思いをしているのだろう。燈籠はとにかく、布団に入った。外は漆黒の闇夜だった。雲に隠れて月は見えなく、慰めてくれるものはなかった。

参拝人決定 三

浄瑠璃や葵が参拝人に決定したという噂は結局、学舎のほとんどの生徒が耳にし、学舎はその話でもちきりとなった。

そのため浄瑠璃は廊下を歩くときでさえ周囲の目を感じるようになった。今もそうだ。教室の外を歩いていると、他の者達が一斉に浄瑠璃を見る。

「無能の浄瑠璃じゃない。百合桜や葵の足を引つ張らないよう気をつけるよ。」

男子生徒の乾という大柄だが程度の低い（女生徒達の話では）男子生徒が浄瑠璃をからかうが、浄瑠璃は気にしなかった。いや、気にしないふりをした。内心では殺したいほど憎く思ったが、実際に浄瑠璃は自分が参拝者となって果たして何の役にたつのかと思っていた。参拝人は無作為に選ばれる。だから、自分のような無能が選ばれてもおかしくはないのだ。そのまま気にしないという体で通り過ぎようとしたが、やはり報復はしたい。

「死ぬ」浄瑠璃がぼそりと呟いたが乾は気のせいだと思ったようだ。浄瑠璃は一見、大人しく気弱な生徒に見えたからだ。

廊下では他の生徒もすれ違いざま浄瑠璃に対し何かいいかげな顔をする。同じ組の、葉摩子の取り巻きのような存在の一人である道子が浄瑠璃を見るなり、「あら浄瑠璃。こんなところで油を売ってないでとつとと訓練場で葵と一緒に薙刀の練習でもしたら？」と言った。

「とつとと葉摩子のご機嫌取りに戻りなよ」浄瑠璃は鋭い目で素晴らしい、相手は少しあっけに取られ、悔しかったようで他の仲間に浄瑠璃の悪口を囁きあった。

また、弓近の取り巻きも浄瑠璃を見るとにやけた笑みを浮かべた。「遺書は用意した？ あんたはどうせ鈍いし何もできない無能なんだから、そのくらいは書いておいたほうがいいと思うわよ」弓近の

取り巻きの智慧が言う。

「あんたが書けばいい。どうせこの学舎を卒業しても馬の馬糞掃除くらいしか行き場がないんだから」浄瑠璃はそう返したが、これは少しやりすぎかなと後悔した。しかし相手は手強かった。傷ついた顔を浮かべたが、まだ余裕があった。

「あんたが死ねばあの広い部屋をあたしが使ってやるよ」

「あなたの気品には似つかわしくない部屋よ。残念だけど、分相応を考えたほうがいいわ」少しゆったりとしているが鋭い口調で浄瑠璃は返す。

「死ね」智慧は浄瑠璃の背中に捨て台詞を吐いた。

自分の組に戻る直前に、男子生徒の一人が「うわあ、浄瑠璃が参拜人か。これで京は滅ぶな」と皮肉を吐いた。

「あんただけ滅べばいい」教室に入る直前、浄瑠璃はそう呟いた。

取り巻き達がそれぞれの親分に泣きついたのだろう。授業が終わると葉摩子と弓近が浄瑠璃の前に立った。

「何かな」葵に会いに行こうとした浄瑠璃は二人の阻止に少し動揺していた。取り巻きたちなら比較的余裕があったが、この二人を相手にするのは辛い。浄瑠璃は泣きそうになった。ただでさえ死ぬほど嫌な任務を押しつけられたというのに。

「あんたさ、自分が大変なのはわかるけど他の人間に八つ当たりするのはよくないと思うんだよね」葉摩子は相当お怒りのようで、目が鋭い。

「別に八つ当たりなんて……」

「あんたが他の参拜人に比べて劣っているのは致し方ないとは思いますが、ただ、あたしならもう少し努力しようとするけどね。何なの？ 参拝の旅は遊びじゃないんだ。京全体の存亡がかかった重要なものなんだよ」

「それは、わかってるけど」ごにごによごと浄瑠璃は口にする。

葉摩子は大きなため息をつき、それが浄瑠璃にはたまらなく傷つくものだった。「まあいいや。身の程を考えたほうがいいって話。」

あんなんかが参拝人じゃなければよかったのに」

葉摩子は自分の席に戻っていき、その周りには道子たちが浄瑠璃を睨みつけながら何かを喋っていた。

浄瑠璃は目の潤みを隠そうと袖で拭いた。葉摩子は去ったが、まだ同じような力を持った弓近がいるのだ。

「まあ、あたしは別にあんなことは思っていないし、あなたに文句なんてないよ」弓近は浄瑠璃には意外な言葉を発した。「智慧が何か生意気なこと言ったんだろ？ それであなたが反撃しただけの話だと思う。だから別にあたしは何とも思っちゃいない。葉摩子の言葉なんて気にすんなよ。あいつ、組のまとめ役だからって張り切ってる。もう他の人間の心情なんてわからなくなってるんだ。あたしはあんなの味方、というか、同情してる。内心不安でしようがないだろ？ ま、応援するから、参拝の旅、頑張つてな。」弓近はぽんと浄瑠璃の肩を撫でると、自分の席に戻っていった。やはり、取り巻きの智慧が浄瑠璃を睨みつけて何かを喋っている。

浄瑠璃は弓近の思いもがけない優しさに我慢できず、教室を離れて厠に駆け込むと個室で止めようとした涙を出るだけ流した。

参拝の旅

学舎は本来、親が来るのを許していない。しかし参拝者の親だけは子供に会つのを許される。親たちは子供が選ばれたことを名譽だとは思わない。ただ嘆き悲しみ、子供に激励を送るのみである。副学長から様々なことを教えられる。食糧確保の手段、狼に襲われたときの対策等。

「普通の狼なら対処は比較的簡単です。火の幻視を使えば間違いない逃げるでしょうから。しかし、狼の中には極めて危険な種族がいます。狼頭山には普通の狼の倍の狼がいます。その狼は術を跳ね返す力があると聞きます。また、術を恐れません」
「狼なんて問題ないです。俺がいれば楽勝ですよ」夏彦が軽口を言い、副学長に叱咤された。

八人が集つたとき、浄瑠璃は仰天のあまり言葉が出なかつた。参拝の成員に燈籠がいる。燈籠殿が！ 浄瑠璃の胸は高鳴り、完全に舞い上がり、旅の不安は霧散した。葵はそんな浄瑠璃の気持ちがかつたのか、少し呆れながらも微笑んだ。

燈籠。夏彦。矢桐。浄瑠璃。百合桜。葵。そして音桂おとかけという最小学年の男子。女生徒に人気があり、背が高く、燈籠とは違う雰囲気きせきの整つた顔立ちをしていた。それから初雁。最小学年の、小柄で大人しそうな様子の男子だ。優男で体つきは貧弱。戦で役立ちそうにはないと思える見た目をしていて。以上八人である。

十月三日になった。早朝、浄瑠璃たちは身軽な服装をし、外の広場に向かった。各学年全ての生徒達が並んで立っていた。浄瑠璃は緊張した。こんなに大勢の人間に注目されている。浄瑠璃と葵は他の六人と一緒に、用意されている舞台に立った。生徒たちがざわめく。重い顔をしている者がほとんどだが、中には笑顔を浮かべている者もいる。いい気なものだと浄瑠璃は思う。

「静粛に」学長が言った。重々しい口調だった。生徒たちは静まり

かえった。

「さて、皆さん。いよいよ阿高山参拝が始まります。ここにいる八人の勇敢なる生徒たちを見なさい。彼らはあなた方のため、京の平穩のために、苦しい旅に出ます。あなた方は彼らを援助することはできません。あなた方にできるのはただ、彼らのために祈ることです。もうすぐに発たねばなりません。騒がしい見送りはいりません。苦行へと向かう彼らの背中を見送るのです」

燈籠を先頭に、八人は出発した。正門を出て、久しぶりの外へ。

「これでしばしのお別れです。今まで教えたことを忘れないように。元気な姿で帰ってくることを待っています。苦しいときは親御さんや友人の顔を思い出すのですよ！」副学長が最後の激励をした。「気をつけて。無事だな」学長はそれだけ言った。

八人は会釈をし、歩き出した。

道は平坦だった。正門から出て、道なりにいくと西と東への分かれ道がある。東へ進む。それから道なりに進む。北へいく道がある。北へ行くと賑やかな町が見えるが、そこを迂回して林道を通っている。町の賑わいが聞こえるが、彼らの進む先は侘びしいものだった。段々と山に近づいてきた。ぽつぽつと民家がある。村人が何事かと八人を眺めた。そしてに付けを思い出して合点がいったのか、うなずくと自分の家へ引つ込んだ。

だんだんと道が上りになっていく。もう媪山の麓にきたのだ。山越えが始まるわけである。

ふと、燈籠は立ち止まった。これまでなんとなく自分が先頭に立って歩いていたが、別に自分は先導役でもなんでもない。学年は上の音桂や八桐がいる。だが今更先頭を誰にするかなど決めるのも妙だと思ったので、とにかくしばらくは先頭を歩くことにした。

「燈籠、先達を任せるから、頼むぜ」思いついたように八桐が今更言い出した。

「先輩方が先導してくれたほうがいいのでは？」燈籠は言った。

「いいよ、お前やれよ」夏彦が言った。

「でも」

「燈籠。全てを任せたぜ。あんたが大将だ」八桐が煽てる。

「お願いします」百合桜が頭を下げた。

「まあ、そこは適当で良いだろう。大した意味はないのだし」音桂が述べた。

「そう」燈籠は観念した。「わかった。じゃ、先頭は俺が歩くよ」

「頼んだぜ、大将」後ろで夏彦と八桐がやし立てた。

「あんたが先頭に立つっていえば？」葵が浄瑠璃に囁いたが、浄瑠璃の耳には入っていなかった。浄瑠璃はずっと燈籠の背中を見つめていて、もう一度振り返るのを待っていた。

山は起伏が激しく、登るのに苦労した。かなり勾配な傾斜もあった。なんとか登りきると、比較的緩やかな傾斜になり、しばらくそれが続いた。木々は紅葉を見せている。もう秋なのだと一同は実感した。

八桐が次第に遅れだした。浄瑠璃も内心ではきつかったが、足を引つ張りたくはなかったので必死だった。女性陣の中でも一番体力に自信があると思われる葵もかなり疲弊しているようだ。

「休憩しよう……な？」八桐は言い、木にもたれかかって崩れ落ちた。

「俺もだいぶ疲れた。休憩しよう、大将」夏彦が荒い息をついている。

「大将はやめる。わかった、休息をとろう」

八人は平坦な場所を選んでそこで休憩を取った。水晶玉の色を見る限りではまだ昼にはなっていない。昼食を取るのはまだ早い。

「腹減った」八桐が早速喚いた。

「我慢してください。俺だって辛いんだ」夏彦も腹を抑えて言う。

燈籠はかすかに嘆息した。役立たずが二人もいては、この先どうなることやら。

「まだまだ頂上まではあるのかな？」葵が呟く。

「結構高い山だ。まだまだだいぶかかるだろうね。疲れてないかい」

音桂が優しげな声で答えた。

「色男め。女生徒に人気があるわけね」葵は浄瑠璃に囁いた。

浄瑠璃は燈籠をちらちらと眺めたが、燈籠は浄瑠璃のことなど視野に入っていないようだった。しかし、浄瑠璃は嬉しげだった。こんなに間近に思い人を見ていられるからだろう。

燈籠は様々なことを考えていた。地図通りに進むのはいいが、食料はどうすればいいだろうか。持参しているものはすぐに底を尽く町や村も通るが、果たして無事に行き着くことができるだろうか。

「何を考えてるんだ、燈籠」夏彦が心配する。

「色々さ」

この八人で果たして無事にやっていけるだろうかと燈籠は思う。

霧窪がいてくれればと考える。彼が入るのなら、八桐と夏彦を捨ててもいい。しかしそんなことを考えても無意味だ。燈籠は水晶玉を見た。もう休憩してから半刻経った。燈籠自身は最初からほとんど疲れていなかったが、もうみんなの疲労も多少は回復しただろう。燈籠は立ち上がった。

「そろそろいきましよう。昼までには山腹にいたいから」燈籠は言った後に自分が先達のようなことをしていることに気づいた。なんとなく気恥ずかしかったし、自分には不得手なもののような気がした。しかし、誰も燈籠の言ったことに異を述べず、立ち上がった。そして燈籠が歩くと残りの七人も歩き出した。とにかく、燈籠はそのまま先導役的立場にいることにした。もう少し経てば誰かが自分が指示するのに不満を表すかもしれない。それまで待とう。

参拝の旅 二

媪山の名の由来は、山の形がいびつで、年を取った女のようなから、といわれているが、定かではない。確かに山の形はいびつだ。

しかし老女とは似ても似つかない。どちらも醜いから、ということかもしれない。高さ一万千尺。高い山である。月の輪熊が多数生息しているが、人を襲ったという話は滅多に聞かない。これだけの人数が武装していればさほど問題はないと思える。問題は次の狼頭山だが、とにかくこの山はさほど苦労せずに越えていきたいと燈籠は考えていた。高さはあるが、頂上まで行く必要はない。山腹にある道を進むのみである。ただ、媪山に登る者は極めて少ないし、十月三日の行事は誰もが知っているので、通るものはまずくない。

一同が山腹まで辿り着いたのは昼を過ぎ、末の刻になるうとしているときだった。彼らは遅めの昼食を取ることにした。背中に背負っていた包みを広げる。干し肉に、野菜。それと煎餅等。質素なものだった。しかし腹の足しにはなった。簡単に食事を済ませ、半刻ほど休み、また歩き出した。道には時々簡易便所が用意されていたので定期的にそれを利用した。普段滅多に利用しないものだが、これがあることに彼らは感謝した。

「熊なんて出るなよ」夏彦が呟いた。

「熊以外にも危険な存在がいる」夏彦にそう返したのは音桂だった。

「へえ、例えば？」と八桐。

「風冬彦とか」葵が言った。

「何それ？」夏彦が笑う。

「知らない？ 冬の精霊。山に住んで、登山中の人に冷たい風を送って、凍死すれすれにさせるのが好きなんだって」

「何だよその精霊。妖怪の間違いじゃないか」八桐が笑う。

「結構有名よね」百合桜が同級生に助け舟を出した。「風冬彦の伝説。そう、この山だったの」

「ここだけじゃない。京の山全てに伝わる伝説」と葵。

「まるで雪女だね」初雁が言った。「あれは北国の伝説だけど」

「風冬彦はもつと性質が悪いって話だけどね」葵はそう言つて葵よりも小さな初雁の頭を撫でた。初雁が嫌がると、葵は微笑んだ。

「だけどそれは冬の精だ。秋には出ないだろう？」音桂が言った。

「季節は関係ないと思う。私の親戚が、岩間山で風冬彦にやられたの。全身氷のように冷たくなって。かろうじて生きてたけどね。

今は元気でいるけど、その人が岩間山に登つたのは六月の半ばだった。突然、辺りが真冬のように寒くなって、雪が降ってきたって」

「怪談じゃないか。だけどちょっと会つてみたい気もする」夏彦が言う。

「そんな奴が出てきたら俺が斬つてやるよ」八桐が豪語する。

ところで浄瑠璃は彼らの話を聞いておらず、ただただ燈籠の背中を見つめていた。先頭をいく彼の二番手になりたかったが、そんな勇氣はなかった。二番手の夏彦が憎らしかった。燈籠は彼らの話を全く聞いていないように見えた。浄瑠璃は、まるで自分と燈籠以外は別の次元にいるようで嬉しかった。

しかし燈籠は浄瑠璃の気持ちなんて全く気づいておらず、旅路のことを考えながらも背後で喋りあう仲間たちのことも考えていた。どうやら仲よくやっているようだなと彼は思い、少し安心した。特に八桐が暴走するのが心配だった。だが大丈夫のようだ。今のところは。

猪が彼らの目の前に現れとき、燈籠と音桂がほぼ同時にその存在に気づいた。大きな猪は警戒した様子で八人を睨みつけていた。

「巨大だな」獣の存在に気づいた夏彦は驚いて二歩後ろに下がった後、感嘆の声を上げた。

確かに猪は大きかった。体長六尺、重さは五十貫を超えるだろう。逞しく育つた、立派な雄猪だ。

猪は警戒しているものの、どうしていいのかわからない様子だった。一同も猪突に備えて警戒していたが、どうも猪に襲撃の意思は

ないように見えた。

「どうする？」夏彦が誰にというわけでもなく問う。

「狩りもしないとならないかもしれないかもしれないっていったけど、あれを運ぶのは大変だろうな」と八桐。

一同がしばし目の前の獣の対処に困っている、猪は突如驚きの叫びを上げ、のたうちまわりだし、それから一目散に茂みの向こうに逃げていった。

「これならどちらも傷つかない」誰かが言った。浄瑠璃が声のしたほうを見ると、百合桜が穏やかに微笑んでいた。幻視の術を使ったのだ。おそらく炎の術だ。猪の慌てぶりはなかった。もしかしたら、普通の幻視ではないかもしれない。

体感幻視。しかし、つい先日まで百合桜は体感幻視を使えなかったはず。しかし、彼女は天才。この数日で覚えてしまったとしても不思議ではない。浄瑠璃は彼女の才能に恐れ入った。

猪が去ると八人は安心して先を進んだ。歩きに疲れ、休憩したのは酉の刻になったときだった。空は薄暗くなっており、頭上にある木々の葉が不気味に揺れ動いていた。半月が朧に光っている。星もちらちらと瞬き始めた。戌の刻に差しかかるうとするときにはすでに真っ暗だった。闇が山々を覆い、一同は旅の最初の夜を越さねばならなかった。彼らは薪を集め、音桂がそれに火をつけた。火を熾すことのできる術士は百合桜、葵、それに音桂の三人だけだった。燈籠は術をほとんど使えないことを少し不安に思ってきた。初級程度の術すらままならないのだ。剣以外に大した術の使えない自分が恥ずかしく思えてきた。

「炎って綺麗だ」夏彦が誰に言うこともなく呟いた。

一同は食事を取ることにした。昼と同じ質素な食事だった。

「猪は捕まえておくべきだったんだ」八桐が呟いた。

「だけど、鍋も何もありませんよ？」初雁が言う。

「道具は町で買えばいい。それよりも必要なのは、重さを軽くする術だよ」音桂が言った。

「そんな術あるの？」葵が聞く。

「あるさ。大変便利な術だよ。物を軽くする術もあれば、重くする術もある。一時的にだけけど」

「そんな術、知らないわ」百合桜が言った。

「そう？ 俺は使えるんだ。ちよつと癖がある業だけど試してみるかい？」

そういつと音桂は夏彦が背中に背負っていた包みに何か呪文をかけた。

「これでいいはずだよ。夏彦、ちよつと持ってみてくれないかな？」

夏彦は言われたとおりに包みを持った。彼はすぐに包みを離れた。

「重くなってる」

「今のは物が重くなる術だ。しばらく経てば解ける」

「便利な術ですね」燈籠は感心した。

「術も使いようってことね」百合桜は呟いた。彼女は少し悔しそうだった。その術を知らなかったからなのだろう。「その術、教えてくださいませんか？」

「いいとも。私が見える唯一の術を教授するよ」音桂は答えた。

音桂と百合桜は術の話をしている。夏彦と八桐は火の側に横になつてすでに眠っていた。

葵が浄瑠璃にもたれかかった。

「ちよつと疲れちゃった」葵は言う。

「あたしだって」浄瑠璃は葵の髪を優しく撫でてやった。確かに疲れた。今日ほど歩いた日はない。明日になったら足がはれ上がっているかもしれない。

「で、どうなの？ あんたの愛しき人と一緒にいれて」

浄瑠璃は初雁と話をしている燈籠を見た。時々笑う笑顔は美しかった。しかし彼の目に浄瑠璃は映っていない。

「そういえば百合桜って左大臣の息子と婚約してるみたいね」葵は話題を変えた。

「百合桜なら幾らでも上を望めるもの」浄瑠璃は燈籠を見つめなが

ら答えた。

「浄瑠璃だつて望むものを手にいえることはできるよ」

浄瑠璃は葵の言葉に少し戸惑った。葵を見ると、葵はこちらに首を寄せて眠ってしまっていた。浄瑠璃は戸惑いつつも微笑んでしまった。互いに体を寄せ合つて寝るのは小さなとき以来だ。相当疲れたのだらうと浄瑠璃は彼女の頭をなで、木の幹に体を預け、揺れる炎と、その向こうにいる燈籠の顔を眺め、目を瞑った。

狼の山

見張りをのぞいて一番早く目を覚ましたのは葵だった。何かが重いと感じたのだが、それは浄瑠璃が自分の上におぶさっていたからだ。葵は浄瑠璃を地面に横にし、起き上がった。火は相変わらず燃えている。

「おはよう」声をかけたのは燈籠だった。

「おはようございます」葵は戸惑いながら挨拶した。燈籠は美しく、対する葵は寝起きで髪も顔も整っていない。慌てて櫛を髪に当てた。「燈籠殿が見張りを？」

「そうだよ。夏彦と俺が交替で。だいぶ疲れたみたいだな」

葵は見張りのことを失念していたことを苦々しく思った。自分が酷い間抜けに思えた。しかし、眠っているのは彼女ばかりでない。

百合桜も、音桂も、矢桐も呑気に眠っている。

「すみません。見張りのことなどすっかり忘れていて」

「いや、何も取り決めをしなかったから悪いんだ。今日はそういうことも話し合おう」

「おはようございます」声が聞こえたのか、百合桜が起き上がった。まだ疲れが取れていないのか、いつもの朗らかな顔つきではなかった。「何だか信じられません。こんなところで寝たなんて」

「じきに慣れる」燈籠は微笑する。「軽く食事を取ったらすぐに出立だ。見張りをしていた夏彦には悪いけど、早くこの山を越えたい」「燈籠殿こそ、満身に眠っていないのでしょうか？」百合桜が言う。

「大丈夫だ」

夏彦、矢桐、音桂、初雁が起き、浄瑠璃が最後に起きた。近くの川で寝癖のついた髪を整えた葵がやってくると八人は簡単に質素な食事を済ませ、出立した。まだ卯の刻になったばかりで、辺りには霧が漂っていて、肌寒かった。歩いているうちに少しずつ暖かくなっていたが、どんよりとした天気は変わらなかった。一同はさほ

ど喋らなかつた。昨日と違って、旅の始めの高揚感は吹き飛んでいた。それに、この山を終えると西で最も危険と名高い狼頭山に入るのだ。

「何、狼なんて怖くねえよ」夏彦が自らを鼓舞するかのようにはいた。

巴の刻になるうとするころ、ようやく狼頭山が見えてきた。下山し、しばらく道なりに進めばすぐにまた山登りだ。これだけ山道が続くとみなのが力が殺がれるかもしれないと燈籠は危惧した。それを防ぐには、なるべく早く越え、その先にある町に出るしかない。

「お前は何か術を使えるのか？」八桐が初雁に聞いた。

「術なんて使えません。だけど、地理と歴史には自信があります」初雁は妙に自信満々に答えた。

「そんなの、役にたたないだろ？」

「何故？」初雁は少しむつとしたようだ。

「何故つて……」

浄瑠璃は初雁が学年でもなかなかの成績保持者だということを出した。この面子には優秀な者が揃っている。だが術を使える者は圧倒的に少ないようだ。

「下りの道も疲れるな」夏彦が呟いた。

媪山を降りたのは、牛の刻になりかかったところだった。音桂の体を少し軽くする術を駆使し、一同がさほど疲れずに、速く降りることができた。

「風冬彦が出なくて助かった」夏彦が葵に言った。明らかにそんなものはいない、としいたげな夏彦の表情に、葵は腹が立った。しかし、何も言い返さないでおいた。

道なりに進み、狼頭山の麓にたどり着いたのは末の刻で、一同は畑の近くにある茂みに腰を下ろした。すぐ近くに村があるが、村にいけば定められた通路から離れることになる。食事を終え、休憩は一刻ほど取った。その間に燈籠と夏彦は仮眠を取り、音桂が木の上に乗って見張りを勤めた。燈籠と夏彦の仮眠が終わると、八人は足

を進めた。

「川を挟んだ道で富嶽の連中が歩いていたよ。八人とも健在だ」音桂が言った。

燈籠は霧窪のことを思った。だが会うことはできない。無事を祈ることしかできない。

平坦な道は段々と起伏を帯びていき、次第に木々が増えていった。無数の葉が頭上を覆い、陽光に影が差した。緩やかに登り坂になっていき、狼頭山へと入った。一同は慎重に進んでいった。傾斜は緩やかで、道に比較的上りやすく、障害物もなかった。ただ登り途中に茂みで見つけた猪の白骨が、何か不吉なものを予感させた。

昼になった。何もなくても山道はきつい。八人は休憩を取ることにした。燃料を集め、火を熾す。質素な食事はまだまだたっぷり残っている。緊張と不安の中、食事を終えた。

「少し休もう。場所が場所だけにあまりゆっくりもできないけど」燈籠が言った。

「だけど俺もうくたくただよ。このまま眠ってしまいたいね」夏彦が喚いた。

「この山さえ越えればぐっすり休める」音桂が言った。「土の下じやなく、畳と、布団の上で」

半刻ほど休憩してすぐにまた歩き出した。狼さえ出なければ山道はそれほど悪くはない。川のせせらぎ、鳥のさえずり、木陰から照りつける陽光。むささびが跳び、栗鼠が木を駆け回っている。狐が顔を現したが、すぐに姿を消した。

これだけ動物がいれば狼にとっても天国のはずだ。できれば狼達が腹いっぱい、こちらに興味を持たないことを祈るのみだと燈籠は思う。

ところで浄瑠璃はすっかり疲れてしまい、歩くのを止めて休みたかったが、まだ誰も弱音をはかないので仕方なく重い足を動かした。そろそろ八桐辺りが愚痴をこぼす頃だと思う。浄瑠璃は八桐が少し苦手だった。見つめる視線が、何か厭らしい。葵もそう感じている

だろつ、八桐と会話するときには薄気味悪いものを眺める顔をしている。

「疲れたな」呟いたのは八桐だ。

「もう少し我慢ですよ」夏彦が言った。顔つきからして、夏彦も疲れている。

音桂が立ち止まった。彼は探るように辺りを見回した。

「どうしました？」初雁が尋ねる。

「獣が動く気配がする。複数いる」

「狼か」燈籠は刀を構えた。

「おそらく。だけど、まだそれほど近くじゃない。ゆっくり進んでいこう」

一同は言われるままにゆっくりと進み、それから開けた場所にくると八人は陣形を組んだ。

「どうなの？」葵が弓を構えながら音桂に訊いた。

「うん、少し前から我らを取り囲んでる。だけど、仕掛けてくる気がないようなんだ」

「大した地獄耳で」夏彦が刀を構えながら言う。彼の耳にも、目にも狼の気配など全くしないようだ。

浄瑠璃も耳を澄ましたが、何も聞こえてこない。風がざわめく快い音と、木々がしなる音がするだけだ。状況が状況でなければ、とても心地よい場所だ。

「少し離れた」音桂が言い、弓をしまった。

「向こうも警戒してるってことかな」燈籠も刀をしまった。

一同は多少の緊張をしながらも山道を登る。傾斜の激しい場所を登り終わると疲れきってしまい、溪流の側で休憩をすることにした。風が強くなってきている。白蛇が川を泳いでいく。そろそろ末の刻が終わろうとしている。

浄瑠璃は翡翠の勾玉をじっと見つめた。これを触るといつも心が穏やかになる。こんな場所ではさほどの効果は得られないだろうと思ったが、自分の部屋で眠っているような穏やかな気持ちになるこ

とができた。

「翡翠か」いつの間にか燈籠が側に立っていて、浄瑠璃の勾玉を眺めていた。

「はい」浄瑠璃は戸惑いつつも返事をした。「祖母の形見なんです」燈籠は浄瑠璃の勾玉を見て、それから浄瑠璃の顔をまじまじと眺めた。全く気づかなかった。こんなにも美しい少女が近くにいたなんて。自分の目は節穴だったのだろうか？ いや、緊張していたんだ。先導に立たないといけない身として、そういったことに気づかなかった。狼が近くをうろついているようなこんな状況でそのことに気づき、燈籠は少し恥ずかしくなった。

「燈籠殿の勾玉は？」浄瑠璃は少しの沈黙に耐えられなくなり、訊いた。

「俺のは瑪瑙なんだ」と、燈籠は茶色の勾玉を浄瑠璃に見せた。

「綺麗ですね」

「翡翠のぼうがずっと綺麗だと思うな」燈籠は浄瑠璃の首の下にある勾玉を持ち上げた。綺麗だ。この少女によく似合っている。なんということだ。こんな状況で。

「うん、綺麗だ」燈籠は言った。

浄瑠璃はこのまま逃げてしまいたかったが、話す機会を逃したくないという気持ちで勝った。

「燈籠殿の勾玉は、どんな効果があるのですか？」

「ただのお守りだよ。術から身を守ってくれるなんていう胡散臭いものじゃない」

「私のもそうです。でも危険が迫ったときに知らせてくれる効果があるそうですけど」

「この腕輪もそうさ」燈籠は腕をめくって白珊瑚の腕輪を見せた。

「綺麗ですね」浄瑠璃は白珊瑚の腕輪と、燈籠の顔を交互に見ながら言った。

「お守りだよ。ただの気休め。今まで何かいいことがあったとは思えないな」

夏彦が急に燈籠の横に来た。

「魚！ 魚取ったぞ！」夏彦は虹鱒を燈籠に見せた。

燈籠と浄瑠璃はまだ話をしていたかったが、しぶしぶ夏彦に対応した。「そうか、やったな」

「さっそく焼いて食べよう。八桐も結構取ったからな。あと猪の肉でもあればいいんだけど。何、火を焚けば狼も寄ってこないだろ」

一同は食事を取った。大きな薪に火をつけ、そこに串を通した魚を入れ、焼ごろになったら取りだして食べた。魚は旨く、一同の心と腹は癒された。

炎は燃え、一同はその炎が外敵の妨げになるよう祈った。ぱちぱちという音は眠りへと誘う呪文のように彼らの耳に心地よく聞こえてくる。その中で、音桂が厳しい顔をしていた。今にも何かに襲われるのではないかとう緊張感を一同が失わなかったのは音桂のその表情のおかげだった。一同がゆっくりとくつろぎ、まどろみの中にいるときに音桂は木の上に立ち、辺りを見張った。音桂が木下を見ると、百合桜以外の全員が眠りについていていた。

「君も眠るといい」音桂が声をかけた。

百合桜は頷いた。「こんな草むらだとうまく眠れないんだけどね。ちくちくする」

夜も深まると燈籠が起きて、音桂と見張りを交代した。

「気をつけてくれ、燈籠。狼達がうろついている。こちらの様子を窺っている。かなりの数だ」

「連中たちもかなり慎重になっっているみたいだ」

「だが奴らも寝る時間だ。今夜のうちに襲ってくることはないだろう」

卯の刻になると燈籠は一同を起こした。火を消して出立する。日が昇ってくるのと食事を取り、すぐにまた歩き始めた。右側に切り立った崖があり、崖下に与根川が轟々と音を立てて流れている。陽光は輝くばかりに燦々と降り注いでいるが、彼らは日の光を忌む魑魅魍魎のように顔を顰めながら歩いた。音桂は絶えず辺りを窺い、昨

日よりも深刻そうな顔をしていた。

登頂付近についた。ぐるりと木々に囲まれている開けた場所に出た。襲われるには好都合の場所だと彼らは思った。すでに日は高い。ここで昼食を取ることにした。昼食の間は音桂が落ちつかないので一行は食事を楽しむことはできなかった。これからさらに下山するのだが、燈籠は思った　どうせくるのなら、さつさとこいと。その望みはすぐに果たされることになるが、その前に夏彦が弱気なことを呟いた。

「俺、帰りたくなってきた」

その言葉を聞いた燈籠はそれも無理なからぬことだと吐息をついた。すでに狼に囲まれていることは音桂だけでなくともわかった。ちらちらと狼の頭部が見え隠れしている。どこかで遠吠えが聴こえてきた。

「狼共が殺気だっている。そろそろ腹の限界らしいな」

音桂が言うのと、まるでそれが合図かのように狼達が行の前に姿を現した。八人はすぐさま戦いの構えを取り、輪になった。灰色の毛に包まれる狼達は、普通の山で見かける狼より一回り大きく、それに狡猾で、残虐だった。狼はすでに一行を取り囲んでおり、さらにじりじりと近寄ってきた。

一匹の狼が襲ってきた。狙われたのは初雁だった。その跳躍力も並の狼とは段違いであり、初雁は一瞬で喉笛を噛みちぎられるところだった。間一髪、葵の薙刀が狼の横腹を突き刺した。葵が刀を抜くと狼はよろめいて倒れた。

「结界を！」燈籠が叫ぶ。

「無駄だ！　匂いではれる」音桂が叫び返し、狼の一匹に一矢をお見舞いした。頭部に一矢を浴びた巨狼は、よろつき、倒れた。だらりと舌が垂れる。

三匹の狼が一度に襲い掛かり、さらに二匹、それから四匹の狼が飛び掛ってきた。

百合桜が体感幻視の炎を飛び掛る狼の視界に送り込むと、狼達は

攻撃を中止し、目を睜るほど素早く後退した。百合桜が術の成功に喜ぶ間もなく、疾風のように一匹の狼が飛び掛ってきた。狼は白く群れの中ではそれほど大きさはなかった。しかし、狼は白い矢のように浄瑠璃に飛びかかってきた。

浄瑠璃は何が起こったのかわからなかった。狼が飛び掛ってきて、その狼が急に不自然な動きをして後退し、それからまたさらに一匹の狼が眼前に迫ってくる。この勢いだただではすまなそうだ。狼の白い犬歯が光り輝いて見えた。

そのとき、浄瑠璃の勾玉が反応した。勾玉から光が飛び出て、狼を切り刻む。浄瑠璃にはそう見えた。何かが、切り刻むように見えた。何かよく見えない、光るものが狼を細切れにした。狼の体はちりぢりになって風に吹かれて消えた。勾玉は色を失い、光らなくなつた。

しかし危険が去つたわけではなく、狼達の数は依然として多く、幻視によつて戦意を失つた狼を外してもまだまだ一行の数を上回っている。百合桜はさらなる術を発動させようとしていた。音桂は弓を素早く引き絞り、二匹の狼を仕留めた。葵も、一匹の狼を射止める。その葵に飛び掛ってきた狼を燈籠が切り捨てた。

百合桜が術を発動させようとしたとき、狼達は突然逃げ出した。何が起こつたのかわからず、一行は呆然としつつ、警戒を怠らなかつた。高い、木々の林の中から何かが動いている。それはとてつもなく巨体で、とてつもなく素早かつた。赤みがかつた茶色い毛をした巨大な狼が姿を現した。狼と呼んでいいものかわからないほどの巨体だが、一行は彼らの名前を知っていた。赤狼と呼ばれる狼だ。神格化されている、生ける伝説。それが、三匹いた。三匹の巨狼中の巨狼が一行に立ちふさがり、牙をむき出している。

「なんてこと」百合桜が小さく呟いた。彼女はすでに何度か彼らに体感幻視の術の中でも、彼女の得意とする強力な炎の幻視を行っていた。しかし、三匹の赤狼は意に介しないようだった。彼らは炎が見えていたが、それが見せかけということも知っていた。

術が効かないということとは、百合桜には衝撃的な事実だった。

燈籠が先頭に立った。彼は刀を構え、いつでも斬りかかれるよう殺気だっているが、彼自身、脅えは隠せないでいた。

音桂は燈籠の後ろで弓を構え、相手の目に狙いを定めようと狙いをつけたが、音桂は手が震え、結局腕を下ろしてしまった。夏彦は呆然と狼達を見るだけで、八桐は木々に姿を隠した。葵も音桂と同じく、引き絞った弓を下げてしまった。矢が当たったところでどうにかなる相手とは思えなかったし、相手を興奮させたくなかった。葵も心底脅えて、戦意は失せていた。初雁は失神していた。

浄瑠璃はすでに恐怖で精神が参っていた。彼女は命の危険にも関わらず、先ほど自分の危険から守ってくれた勾玉をいじっていた。しかしもはや勾玉が光ることはないだろうと浄瑠璃は思った。今は眠りについたように光を失っている。復活するにしてもしばらくの間はかかるはずだ。浄瑠璃は一瞬、自分の祖母のことを考え、戸惑いの気持ちを抱いた。憎しみの気持ちと、感謝せざるをえない状況。祖母に救われたのだろうか。あれだけ憎かった存在から譲り受けた道具に。

しかし、どうやらそれも一時的なものだったようだ。自分は今から死ぬのだ。無残にも食い殺される。あの鋭い、白い歯。なんという大きさだろう！

神格化された魔物。山から山へ渡り歩き、あらゆる獣を喰らう。人間との戦いで最初から少なかつた数はさらに少なくなり、もはやこの国では数頭ほどしかいなくなった。彼らは人間を滅多に襲わない人間を恐れているからだ。彼らは何百年もの長きに渡り人間と戦い、彼らと対抗することをやめた。人間には勝てない。そのことを彼らは理解していた。人間が彼らを神格にしたように、彼らは人間を特別視するようになった。

と、という言い伝えだった。史実は不明だし彼らが衰退へ向かったのか昔は繁栄していたのか、今となってはわからないことだった。

浄瑠璃たちをしばらく睨み付けていた赤狼は、木々の中へと跳び見えなくなった。一同はすぐさま逃げ出した。失神した初雁を燈籠が運び、彼らはなんとか逃げることに成功した。呆然としている浄瑠璃の手を引つ張っていったのは葵だった。

「あれはこちらを襲う気はなかったみたいだ」木陰で休んでいると、音桂が言った。「何故かはわからないけど」

「頭のいい狼は人を滅多に襲わないっていうけど」初雁を木により掛け、燈籠が言った。どこかで、そんな話を聞いたような気がしたのだ。

「あやうく、今年度が最高の大惨事となるところだった」夏彦が笑う。その顔は心底安心している。

初雁が目を覚ました。彼はぼんやりとした顔で辺りの様子を見渡した。

「狼はいなくなつたよ」葵が教えた。

初雁は起き上がった。そして燈籠を見ると頭を下げた。「すみません。情けない失態をしたようで」

八桐が初雁の肩を叩いて慰めた。「気にすんな。お前が役に立つなんて思ってたねえよ」

あんたもなと燈籠は思った。

音桂が立ち上がる。「先を急いだほうがいい。ここは危険すぎる」誰もが同感だった。一同はすぐに出立した。下山し終わるともう夕刻で、一同は危険な山を越え、安堵で一杯だった。彼らは林の中で夕餉をとった。風が気持ちよく、穏やかな気分になれた。一晩明かすのはここがいいと決まり、星空が瞬くころになると夏彦と葵を見張りに、眠りへとついた。

夏彦は早々に眠ってしまった。全く役立たずだと葵は憤慨したが、見張りをやめるわけにもいかない。夏彦は昨晚見張りをしてくれたことを思い出した。寝かせてあげよう。

葵は空を眺めた。見晴らしがよかった。星々が暗黒の海の中で瞬

いている。心地よい風。一時は死を覚悟したが、今は苦楽を共にする仲間達に囲まれている。参拜の旅は、単に辛く、不運に見舞われる旅ではなくなるかもしれない。葵はそんな希望を抱いた。子の刻が終わろうとするとき、初雁が起きて葵と交代すると言い出した。

「僕は今のところ何の役にも立ってない。朝まで見張りをやるよ」

葵としては、これは当然のことに思えた。

「お願いするわ」

「ゆっくり休むといいよ。できればだけど。今日は疲れただろうか

ら

葵は早速横になり、眠っている仲間たちを眺め、もう一度満天の夜空を見渡すと、心地のいい眠りについた。

夜の道

浄瑠璃が起きたのは卯の刻を過ぎるところで、他の仲間もみんなもつ起きて朝食をとっていた。葵が浄瑠璃が起きたのに気づき、朝餉を持ってきてくれた。

「調子はどう？」

「よくわからない」浄瑠璃は髪を梳かしながら答えた。まだ頭がはつきりしない。

「顔洗ってすつきりさせればいいよ」

浄瑠璃はいわれるまでもなく近くの川原で顔を洗った。すつきりした。水を飲む。上流の水とは違うが、喉を癒してくれる。

気配がしたので、振り返ると燈籠がいた。

「おはよう」燈籠が軽やかな調子で挨拶をする。

「おはようございます」浄瑠璃は緊張しながらも答える。

燈籠は何かを言うのをためらっているかに見えた。

「すぐに出立ですか？」

「朝食を摂ってからね。そうだ、君の勾玉を見せてくれないか？」

浄瑠璃はすぐに首に掛かった曲玉を持ち上げて燈籠に見せた。燈籠はおそろおそろ、といった様子で曲玉に触れた。

「昨日は驚いた。この勾玉なんだろう？ 狼を倒したのは」

「たぶんそう……この勾玉は私を守るためなら何でもする。そういう呪いがかかっているんです」

「呪い？ だけど君を守るための術なんだろう。こうして俺が触っても何も起きない。昨日のように危険な状況に陥らない限りは」

浄瑠璃はこの際だとこの勾玉に関する話を燈籠に伝えることにした。

「これは呪われているんです。これはあたしを守るためのものではないんです。あたしを……」

「おい二人とも、早く食事をとろう」割って入ってきたのは夏彦だ

った。燈籠はまたもや邪魔されたことに多少苛立ったが、「ああ、朝食にしよう」と応じた。

朝餉は軽く、質素だった。しかしその質素な食事をしたせいで食料が尽きた。ここを道なりにいけば村につく。森の中に小さな村がある。八人はその村で食料を整えることにした。

出立。燈籠が先頭に立つ。早ければ夕暮れ前につくはずだ。

天気はどんよりと曇っていた。道は平坦で進みやすかった。木々の黄葉が色鮮やかだった。イチヨウの葉が舞い落ちる。浄瑠璃はそれらを感慨深げに眺めてながら進んだ。燈籠も同じく、美しい秋の森に魅入り、一同の足取りは軽かった。ざくざくと葉を踏み、ひらりと舞う葉を眺め、時折出くわす栗鼠などを見ると心が安らいだ。やがて正午を過ぎると雨が降り始めた。激しくはないが、八人は濡れるのを嫌がった。森の中でも雨を完全に遮断することはできない。仕方なく八人は燃料を集め、百合桜がそれに火をつけた。火の色は鮮やかに燃え、秋の雨にも負けなかった。八人は火を囲んで火の暖かさに感謝した。

雨が止むと、再び歩き出した。空は暗く、いつまた振り出しそうになるかわからない天気ではあった。浄瑠璃は水晶を見た。水晶玉は黄色く光っている。末の刻を過ぎようとしている。

「あとのくらいでその村につくんだよ？」八桐の言い方から、明らかに歩き飽きたようだと思われた。

「まだかかる。急げば薄暗くなる頃にはつくでしょう」燈籠は答える。

「雨はもう勘弁だぜ」夏彦が言う。

浄瑠璃は空を見た。怪しい天気だ。またいつ降ってくるか。

「浄瑠璃、まだ大丈夫？」葵が聞いた。

「大丈夫ではないわね」

「あたしも疲れちゃった」葵はうんざりといった様子だ。

「もう少しの辛抱よ、たぶん」

「本当に？ あたし、暖かい湯に浸かりたいの。それにこの臭くな

つてきた白装束の変えも欲しいしね」

浄瑠璃も風呂に入りたかった。ここでは御香で匂いを隠すこともできない。

「夜盗でも出なきやいいけど」背後で百合桜が呟いた。百合桜はいつものように燐とした表情ではなく、その顔は憂いに満ちていた。

葵は振り返る。「そんなの平気よ。あたしがいるんだから」

葵は自信満々に言い放った。葵は弓と、それに薙刀に秀でているのを浄瑠璃は知っていた。

「でも相手は複数よ」

「妖術で追っ払っちゃえばいいじゃない」

「そんなに甘くないわよ……術って結構大変なんだから」

「でも狼の群れに襲われたときは助かったわ。百合桜がいなかったら今頃狼に食い殺されてたかもしれない」浄瑠璃が言った。

「そうね。感謝してるわよ」葵が言う。

「気にしないで。術は人を助けるためにあるんだから。いざというときに術の使えない術士なんて全くの無意味じゃない」

夕暮れになり、そして夜になろうとしていた。八人は暗くなりつつある森を進んでいた。一度休憩し、辺りにある食べられる食材を探したが得られたものはわずかで、貧弱な山菜と茸だけだった。

「栗鼠を見つけたときに捕っとけばよかった」夏彦が呟く。

「腹減ったし足もいてえ。俺はもう歩けないぞ」八桐がぼやく。

燈籠も少し焦っていた。ここでしばらく休んでいくのもいいが、夜遅くに村を訪問したくなかった。できれば茜の刻　水晶玉が青になりきる前に着きたい。

「半刻ほど休憩。それからすぐにまた出立でどうですかね？　大丈夫、もうすぐに着きますよ」燈籠は言った。

「大将は偉いねえ。俺はもうこのままここで朝まで寝たっていいと思ってるんだけどね」夏彦が言う。

「燈籠を先導にしたのは君もだろ。俺達は先導者に従うまでさ」音桂が言う。彼だけは悠々と構え、まるで疲れを見せなかった。

女三人は疲れきっており、葵でも辛そうにしていた。燈籠は彼女たちを見て、同情の気持ちを抱いた。しかし、村までいけばこころも遙かにいい休息が取れるのだ。一刻も早く村に着くことだ。地図を見れば村は本当にもうすぐなのだ。

「腹減った」八桐は一定の間隔でそう呟いた。

時間がきた。燈籠が立ち上がった。「参ろう」

空はとつぷりと暗くなり、本格的に夜になった。暗闇の森に不気味な鳥の鳴き声が一同を不安にさせた。鳥の鳴き声を除けば、森の中は静かで、八人が落ち葉を踏む音しか聴こえなかった。肌寒く、彼らは防寒衣を羽織った。地味な色の、厚手の防寒衣は寒さから彼らを守ったが、彼らを見ても京内に住む貴族とは思えないだろう。

やがて再び雨が降り始めた。雨は冷たく、だんだんと雨脚を増していった。八人はずぶぬれになり、冷たい状態に耐えながら、疲れた足を進まねばならなかった。

「最悪だ」夏彦が言った。

「ああ。最悪だ。こんなこと選ばれたのは俺の人生最悪の不運だ」八桐がぼやいた。

「文句はやめましょう」燈籠がたしなめる。「大丈夫。もうすぐだ。もうすぐだから」

音桂は雨の中、何かを聴きつけた。何か、笛が鳴るような音。他の七人は気づいていないようだ。この雨では無理もない。

音桂は見た。何か東の森の、木々の上を飛んでいくのを。それは人のように見えた。

誰にも知らせず、音桂は周囲に気を配りながら歩いた。

激しい雨は次第にさらなる激しさになり、一同はずぶ濡れになり、防寒衣が重かった。それでも彼らは必死に足を進めた。やがて雨は降り止むことはなかったが、激しさを弱めていった。

何かいるとすぐに気づいたのは葵、燈籠、音桂の三人だった。遅れて夏彦も気づいた。一種の殺気のようなものを彼らは感じ、それからひんやりとした冷たさを味わった。ほんの一瞬だったが、肌に

氷を当てられたような冷たさで、一同は混乱した。

「何だ？」夏彦が驚いて辺りを見回した。周囲には誰もいない。暗闇で見える視界では。

音桂は先ほど見た者が関係していると瞬時に判断し、弓をたがえた。

「どうしたんだよ？」八桐には全くわからない状況だった。

百合桜は術をかける相手を探したが、見つからなかった。浄瑠璃はただただうるたえるばかりだった。葵は音桂と同じく、弓をたがえ、全方位に気を配る。

音桂は聴いた。何かが、細い木の枝に止まった音を。普通は小動物のはずが、なぜか音桂にはもっと大きなものが止まったということがわかった。弓を音のほうに向ける。一瞬、彼は影を捉えた。弓を射るべきか迷った。なぜならそれはこちらに向かつておらず、素早くどこかへ離れていくところだった。異様に目のいい音桂だけがその動きを捉えることができた。しかしすぐに視界から消えた。

「去った」

燈籠は刀を収めた。「何だったんだろう？」

「人に見えた。だけど普通じゃない。不気味な感覚はなかった」音桂は答えた。

「水風呂につかったように冷たくなったんだぞ。何だか知らないが、物の怪の類なら射殺したほうがいいんじゃないか」夏彦が言う。

「だけでも去ったのなら仕方ないでしょう。追跡は無理よ」百合桜が言った。

葵は弓をしまった。「早くいきましょ。いつまでもこんなところにいたらまた何に妖術をかけられるかわからないわ。魍魎退治は昼間のうちがいいでしょ」

「そつだ。もう目と鼻の先に村があるはずなんだから。行こう」燈籠が言った。

結局そのことについて考えるのはやめ、一同は歩き出した。

山奥の村

村についたのはそれからすぐのことだった。その頃には雨が再び強くなり始めていた。民家が見えたときには一同は狂喜した。村の入り口には高台があり、そこで松明を掲げた見張りが彼らを見つけた。彼は指で一同の数を数え、それから高台を降りて村の奥へと向かっていった。きつと人を呼んでくるだろうと一同はそのまま村に乗り込み、広場まで向かった。小さな村だが、民家は密集していて、村人同士の交流も深いだらうと予想できた。

広場の真ん中に笠を被った男が三人立っていた。真ん中の男が前に出てきて、笠を取った。男は年寄りだった。ほっそりした顔に、小さい目。顎に銀がかつた髭を生やしている。続けて他の二人も笠を取った。中年の男の顔が二つ現れた。

「阿高山参拝の面々ですな？」ひげの老人が言った。

当然、村人達は参拝のことを知っていた。毎年彼らはここまで到達した京の学舎の生徒たちを世話しているのだから。

「そうです。夜遅くに訪れることになって申し訳ありません」燈籠が答えた。

「いえいえ。だいぶ濡れたようですね。まずは暖かい湯に浸かり、それから食事になさいましょう。私はこの村の長、喜好と申します。ささ、参りましょう」

一行は村長の家むらおみに赴いた。彼の家は村の一番奥にあり、村では一番大きな家で、八人が宿泊しても問題なさそうな家は他にはなさそうだった。村長の家の近くに温泉があった。

ここは芦屋と呼ばれる場所で、村の名はそこから取って芦屋村と言った。芦屋村の温泉はさほど大きくないが、旅人たちが浸かりにくることもある。

燈籠たちは早速湯に浸かることにした。湯は熱く、心地よかった。男達は湯に浸かると呻くような声を上げた。

「極楽だ」夏彦は目を閉じ、口元を緩めている。

「一時はどうなるかと思っただよ」八桐が言う。

「でも苦難の後にはいいことが待ってるものですね。後は上手い山の幸にありつければ今日の辛さも吹き飛ばす」

「そうだな、燈籠大将」八桐がそう返す。

「だけど途中のあの冷たさは一体何だったんでしょう?」のぼせて赤い顔をした初雁が疑問を投げかけた。「音桂先輩は何かを見たんでしょう?」

「人のようなものをね」音桂は答える。

「僕は天狗だと思っただよ」初雁は自信ありげだった。

「うん。俺もそう思う。木の枝に乗り、妖術を使うのは天狗くらいのものでしょから」しかし音桂は天狗に特有の山伏姿と翼を見たわけではなかった。

「違うな」夏彦が目を閉じたまま、口を挟んだ。

「何が違うというんだ?」と音桂。

「風冬彦だよ。奴がきたんだ。葵が言ってたでしょ。風冬彦の話を風を自在に操るんだ」夏彦の表情からは、冗談で言っているのかどうか他のものには判断できなかった。

「かもしれないぞ。風冬彦だ。奴に襲われた」八桐が笑う。

「天狗ならありえると思うけどな」初雁が言う。

「どっちでもいいだろ。そんなのは」と、燈籠が言った。「ひとまずはのんびりしよう。明日の昼ごろにはこの村を出たほうがいいし」「もっとゆっくりしたっていいじゃない」八桐が不満そうな顔をした。

「そりゃのんびりしたいですよ。別に他の学舎の連中と競争したいわけじゃないし。だけど、日にちは限られてるんだ。そうゆっくりもしてられない。行くなら早いほうがいい」

「なら日が傾かないうちにいきたいな。牛の頃にはここを出ていよう」音桂が言う。

夏彦はため息をついた。「かったるい」

岩壁の向こうの女風呂では葵たちが湯に浸かり、のんびりと体の疲れを癒していた。三人ともすっかり冷えてしまった体を温め、心地のいい気持ちだった。

「今日は疲れた」葵がぼそりと言った。

「本当ね」百合桜が同意する。

「ずっとここでのんびりしたい。ゆっくり疲れを癒したら、そのまま引き返すの」浄瑠璃が目を輝かせている。

「それならいいけどね。明日からまた歩くのよ」葵はため息をついた。「列車に乗ってのんびりした旅ならいいのに」

「いいね。京を出て、東へ行ってみたい。東都まで行って、京では売ってない服を買う。途中で温泉でゆっくりしたりして」

「浄瑠璃、そんなこと夢想してもまた明日からきつい旅よ」百合桜が浄瑠璃の夢想をとめた。学舎を出たらそんなの、いくらでもできるけど」

「それはそうだけど……ね、今度いこうよ、葵」

「そうね。東も、さらに東北にもね。西にいったところから観光船で船旅するのもいいなあ」

「他の世界に行くなんて無理よ。私達は京だけ。京だけしかないんだから」百合桜が言う。

「百合桜、夢を壊すようなこと言わないでよ。国は本当は広いのに」
「でも葵ならどこでも行ける気がする」浄瑠璃が言う。

「火の国は小さいし、船は他世界を通さない。それが現実か」葵はため息をついた。

「火の国は小さいけど、北から南まではかなり歩くよ。この旅とは比べものにならないくらい」浄瑠璃は言う。「全国食べ物巡りも楽しそう」

「二人とも、夢を見るのは旅が終わってからにしてもいいでしょ」
百合桜が呆れたように笑う。

「百合桜は学舎を出たらどうするの？」葵が唐突に聞いた。

百合桜は不意の質問に真面目な顔をした。葵はじつと百合桜の目を見ている。

「さあ……私としてはさらに上の術士を師にして、高等術士になりたいんだけど。あなたたちは？」

「私も浄瑠璃も何も考えてないの。百合桜なら高等術士になれるでしょうよ」

「そろそろ考えたほうがいいわよ。結婚するなら、相手探しもしないとな。二人とも相手はいるの？」

途端に二人の顔が沈む。

「百合桜は左大臣の息子と婚約しているんでしょ？ 学舎を出たら色々急がしいんじゃない」葵が言う。

「あら、別に婚約はしていても、応じるかどうかは別よ」百合桜は答え、いきなり立ち上がった。

「結婚なんて焦ってないわ。よく知りもしない相手となんて特にね。少しのぼせたみたい。あたし先に上がるわ。二人はまだゆっくりしてて。お先にね」

すらりとした長い脚、くつきりとした腰の括れ、張りのある見事な尻、豊満で形のいい乳房。天女のようなだと称される、整った、歳のわりに大人びた顔立ち。そして天才的な術使い。彼女には自分自身に対する絶大なる自信があり、しかしそれを鼻にかけることも彼女はしない。

葵と浄瑠璃は魅入られたように去っていく百合桜を眺め、彼女がいつてしまうとため息が漏れた。

「あれと争うことにならないでよかった……浄瑠璃、そう思ったほうがいいわね」

浄瑠璃は勾玉をいじりだした。「でも葵も同じくらい美人だよ」「何それ？ ねえ、燈籠殿と話はしたんでしょ？ どう、今でもあなたの理想の人？」

「燈籠殿はあたしのことを意識してはくれないみたい」浄瑠璃は暗い声を出した。

葵はどうかと思った。浄瑠璃は美しい。顔立ちだけでいえば、十分美人といえる。幾分控えめな性格は、男なら守ってやりたいと思いたくなるはずだ。それに浄瑠璃が思っているより燈籠は浄瑠璃を意識している。ほんの少しとはいえ、葵はそれを確信していた。

「あたしみたいなのがいても役には立たないものね」

「だけど百合桜意外ほとんどの人が役に立ってないじゃない。音桂はなかなかすごいみたいだけど。あの人なかなかの弓の腕前よ」

「葵と気が合うかもね。恋人同士になったらお似合いの男女になるわ」

「そう？ まあ、そこそこにいい男だから、恋人はいると思うわよ」

「どうかかな？」

「さあ」

二人とも見つめあい、互いともくすりと笑った。

「大丈夫。二人ともお似合いの相手が見つかるわ。燈籠殿だけじゃなくても男は腐るほどいるもの」

浄瑠璃は答えなかった。葵の好きな相手が気になった。葵がその気になれば男はいちころだろうに。実際、葵は美人だった。百合桜が天女だというなら、葵は……浄瑠璃には例えが浮かんでこなかった。葵だつて誰かに恋をしているはずだ。しかし浄瑠璃には葵が恋心を抱く相手が誰なのかわからなかった。

山奥の村 二

村についたのはそれからすぐのことだった。その頃には雨が再び強くなり始めていた。民家が見えたときには一同は狂喜した。村の入り口には高台があり、そこで松明を掲げた見張りが彼らを見つけた。彼は指で一同の数を数え、それから高台を降りて村の奥へと向かっていった。きつと人を呼んでくるだろうと一同はそのまま村に乗り込み、広場まで向かった。小さな村だが、民家は密集していて、村人同士の交流も深いだらうと予想できた。

広場の真ん中に笠を被った男が三人立っていた。真ん中の男が前に出てきて、笠を取った。男は年寄りだった。ほっそりした顔に、小さい目。顎に銀がかつた髭を生やしている。続けて他の二人も笠を取った。中年の男の顔が二つ現れた。

「阿高山参拝の面々ですな？」ひげの老人が言った。当然、村人達は参拝のことを知っていた。毎年彼らはここまで到達した京の学舎の生徒たちを世話しているのだから。

「そうです。夜遅くに訪れることになって申し訳ありません」燈籠が答えた。

「いえいえ。だいぶ濡れたようですね。まずは暖かい湯に浸かり、それから食事になさいましょう。私はこの村の長、喜好と申します。ささ、参りましょう」

一行は村長の家むらおみに赴いた。彼の家は村の一番奥にあり、村では一番大きな家で、八人が宿泊しても問題なさそうな家は他にはなさそうだった。村長の家の近くに温泉があった。

ここは芦屋と呼ばれる場所で、村の名はそこから取って芦屋村と言った。芦屋村の温泉はさほど大きくないが、旅人たちが浸かりにくることもある。

燈籠たちは早速湯に浸かることにした。湯は熱く、心地よかった。男達は湯に浸かると呻くような声を上げた。

「極楽だ」夏彦は目を閉じ、口元を緩めている。

「一時はどうなるかと思っただよ」八桐が言う。

「でも苦難の後にはいいことが待ってるものですね。後は上手い山の幸にありつければ今日の辛さも吹き飛ばす」

「そうだな、燈籠大将」八桐がそう返す。

「だけど途中のあの冷たさは一体何だったんでしょう?」のぼせて赤い顔をした初雁が疑問を投げかけた。「音桂先輩は何かを見たんでしょう?」

「人のようなものをね」音桂は答える。

「僕は天狗だと思っただよ」初雁は自信ありげだった。

「うん。俺もそう思う。木の枝に乗り、妖術を使うのは天狗くらいのものでしょから」しかし音桂は天狗に特有の山伏姿と翼を見たわけではなかった。

「違うな」夏彦が目を閉じたまま、口を挟んだ。

「何が違うというんだ?」と音桂。

「風冬彦だよ。奴がきたんだ。葵が言ってたでしょ。風冬彦の話を風を自在に操るんだ」夏彦の表情からは、冗談で言っているのかどうか他のものには判断できなかった。

「かもしれないぞ。風冬彦だ。奴に襲われた」八桐が笑う。

「天狗ならありえると思うけどな」初雁が言う。

「どっちでもいいだろ。そんなのは」と、燈籠が言った。「ひとまずはのんびりしよう。明日の昼ごろにはこの村を出たほうがいいし」「もっとゆっくりしたっていいじゃない」八桐が不満そうな顔をした。

「そりゃのんびりしたいですよ。別に他の学舎の連中と競争したいわけじゃないし。だけど、日にちは限られてるんだ。そうゆっくりもしてられない。行くなら早いほうがいい」

「なら日が傾かないうちにいきたいな。牛の頃にはここを出ていよう」音桂が言う。

夏彦はため息をついた。「かったるい」

岩壁の向こうの女風呂では葵たちが湯に浸かり、のんびりと体の疲れを癒していた。三人ともすっかり冷えてしまった体を温め、心地のいい気持ちだった。

「今日は疲れた」葵がぼそりと言った。

「本当ね」百合桜が同意する。

「ずっとここでのんびりしたい。ゆっくり疲れを癒したら、そのまま引き返すの」浄瑠璃が目を輝かせている。

「それならいいけどね。明日からまた歩くのよ」葵はため息をついた。「列車に乗ってのんびりした旅ならいいのに」

「いいね。京を出て、東へ行ってみたい。東都まで行って、京では売ってない服を買う。途中で温泉でゆっくりしたりして」

「浄瑠璃、そんなこと夢想してもまた明日からきつい旅よ」百合桜が浄瑠璃の夢想をとめた。学舎を出たらそんなの、いくらでもできるけど」

「それはそうだけど……ね、今度いこうよ、葵」

「そうね。東も、さらに東北にもね。西にいったところから観光船で船旅をするのもいいなあ」

「他の世界に行くなんて無理よ。私達は京だけ。京だけしかないんだから」百合桜が言う。

「百合桜、夢を壊すようなこと言わないでよ。国は本当は広いのに」
「でも葵ならどこでも行ける気がする」浄瑠璃が言う。

「火の国は小さいし、船は他世界を通さない。それが現実か」葵はため息をついた。

「火の国は小さいけど、北から南まではかなり歩くよ。この旅とは比べものにならないくらい」浄瑠璃は言う。「全国食べ物巡りも楽しそう」

「二人とも、夢を見るのは旅が終わってからにしてもいいでしょ」
百合桜が呆れたように笑う。

「百合桜は学舎を出たらどうするの？」葵が唐突に聞いた。

百合桜は不意の質問に真面目な顔をした。葵はじつと百合桜の目を見ている。

「さあ……私としてはさらに上の術士を師にして、高等術士になりたいんだけど。あなたたちは？」

「私も浄瑠璃も何も考えてないの。百合桜なら高等術士になれるでしょうよ」

「そろそろ考えたほうがいいわよ。結婚するなら、相手探しもしないとな。二人とも相手はいるの？」

途端に二人の顔が沈む。

「百合桜は左大臣の息子と婚約しているんでしょ？ 学舎を出たら色々急がしいんじゃない」葵が言う。

「あら、別に婚約はしていても、応じるかどうかは別よ」百合桜は答え、いきなり立ち上がった。

「結婚なんて焦ってないわ。よく知りもしない相手となんて特にね。少しのぼせたみたい。あたし先に上がるわ。二人はまだゆっくりしてて。お先にね」

すらりとした長い脚、くつきりとした腰の括れ、張りのある見事な尻、豊満で形のいい乳房。天女のようなだと称される、整った、歳のわりに大人びた顔立ち。そして天才的な術使い。彼女には自分自身に対する絶大なる自信があり、しかしそれを鼻にかけることも彼女はしない。

葵と浄瑠璃は魅入られたように去っていく百合桜を眺め、彼女がいつてしまうとため息が漏れた。

「あれと争うことにならないでよかった……浄瑠璃、そう思ったほうがいいわね」

浄瑠璃は勾玉をいじりだした。「でも葵も同じくらい美人だよ」

「何それ？ ねえ、燈籠殿と話はしたんでしょ？ どう、今でもあなたの理想の人？」

「燈籠殿はあたしのことを意識してはくれないみたい」浄瑠璃は暗い声を出した。

葵はどうかと思った。浄瑠璃は美しい。顔立ちだけでいえば、十分美人といえる。幾分控えめな性格は、男なら守ってやりたいと思いたくなるはずだ。それに浄瑠璃が思っているより燈籠は浄瑠璃を意識している。ほんの少しとはいえ、葵はそれを確信していた。

「あたしみたいなのがいても役には立たないものね」

「だけど百合桜意外ほとんどの人が役に立ってないじゃない。音桂はなかなかすごいみたいだけど。あの人なかなかの弓の腕前よ」

「葵と気が合うかもね。恋人同士になったらお似合いの男女になるわ」

「そう？ まあ、そこそこにいい男だから、恋人はいると思うわよ」

「どうかかな？」

「さあ」

二人とも見つめあい、互いともくすりと笑った。

「大丈夫。二人ともお似合いの相手が見つかるわ。燈籠殿だけじゃなくても男は腐るほどいるもの」

浄瑠璃は答えなかった。葵の好きな相手が気になった。葵がその気になれば男はいちころだろうに。実際、葵は美人だった。百合桜が天女だというなら、葵は……浄瑠璃には例えが浮かんでこなかった。葵だつて誰かに恋をしているはずだ。しかし浄瑠璃には葵が恋心を抱く相手が誰なのかわからなかった。

二人が湯から上がり村長の家の前までいくと男が一人立っていた。その男の後に続いて村長の家の中に案内された。そこにはすでに他の六人が揃っていた。

「遅いぞ」八桐は待ちきれない様子だ。

団欒の場は意外なほど広く、予想以上に豪華な皿に豪勢といえなくもない馳走が並んでいた。

「酒はいかがですか？」村長の喜好が男たちに酒を勧めている。

音桂は断り、燈籠、八桐と夏彦は喜んで猪口に清酒を注いでもらった。

百合桜の隣に二つ空席がある。葵と浄瑠璃はそこに腰を下ろした。いい匂いがする。食事の量に不満はなく、食材も食欲をそそる山の幸が並ぶ。久しぶりにまともな食事をすることができる二人は自然と心躍った。

「ささ、召し上がってください。大したものではありませんが」村長が言い、食事を頂いた。茸ご飯を食べ、熱い味噌汁をすすり、近くの川で取れた魚を啄ばむ。実に美味だった。人參や蔘の入った山菜の煮付け。大きな皿には鹿の刺身が盛られていた。鹿の刺身は村長ご自慢の一品らしい。

「ここらではこういったものが上等とされてますな。いつもこういうものを食べられるわけではないですけどね。お嬢様方、味はいかがですか？」

「とても美味しいですよ」葵が答えた。その目は食事に釘付けだ。

「この旅で最高のご馳走です」百合桜が付け足す。

「ここにくる生徒方たちはみなそう言いますな。ここまでの道中は安全でこれでしたか？ 雨以外にですが」

燈籠は狼頭山で狼に襲われた顛末を話した。

「第一の関門ですね。しかし全員無事だった。あそこで非業の最期を遂げた生徒さんも多いですがね」

一同の手が止まった。

「まだまだ旅は長いですから、食べたらずっくり寝ることです」

「何から何まで感謝します」音桂が謝礼した。

「ここは山奥にある村ではありませんが、この有様です。山村はどこも酷い状態です。税金も高い。全く、住みたい世の中です。とても安穩というわけにはいきません」

村長の言葉に動揺したのは音桂と百合桜で、後の六人は流し聞きをして食事をせつせと口に運んだ。しかししばらく経つと、他の六人も村長が何か言いたいことがあるのではという気がしてきた。燈籠は何か嫌な予感がした。

「生活は厳しいです。今から冬になればさらに厳しくなるでしょう。」

中央の近くにあつて、これだけ富むものと貧しき者との落差があるとは、貴方もさぞやびつくりしたでしょう」

実は八人全員、村の暮らしはこういうものだと割り切っていたので驚いた者など一人もいなかった。貧しい暮らして大変と同情する気も起こらなかつた。彼らは、彼らの生活様式をそれなりに楽しんでいるものだと思ひ込んでいた。

「ここは文化の発展した火の国です。戦争が続く他の国々に比べれば、安穩としているといえるでしょう。しかし最も大きい都の一つである京の、中央周辺にある村々が何百年前と似たような暮らしをしています。魑魅の類も出ます。これは由々しき事態ではありませんかな？」

張詰めた空気が辺りに漂いだした。燈籠は少し村長のやり方に腹を立てた。食事がますぐなるだろう、と。せつかくのゆつたりとした雰囲気をぶち壊す気かと。しかし彼らは客人の立場であつた。ちらりと音桂に視線を送ると、音桂も不穏な空気に不安感を抱いているようだ。

「ここでの生活は……苦しいのですか？」誰かが何かをいわねばならぬと思ひ、浄瑠璃が聞いた。

「苦しいかとおっしゃりますが、お嬢様。貴方のような中央の邸宅に住まう人には理解できかねるかもしれませんが、ここでの暮らしは大変です。自給自足の生活というのはやってみないとわかりませんよ。移動手段も今だ徒歩しかない。」老人の顔は明らかに今までの朗らかを失ひ、憤怒を押し殺しているように見えた。ふと、燈籠は最初に彼らに対面したときのことを思ひ出した。どことなく、冷たい表情の彼らに歓迎の意があるのかと疑つたのだが。

「村長さん、私たちはあなたたちの生活に對しどうこういえることはないのですよ」百合桜が無常にも言い放つた。

村長が不適な笑みを浮かべた。「勿論そうでしょうな」ふつと、寂しげな顔つきになる。「いや、余計な愚痴をいいました。すまないですな。聞き流してください」

「今によくならって」夏彦が酒を煽るとそう口にした。

「本当に？」老人はじろりと夏彦を見た。

燈籠は夏彦を睨んだ。しかし夏彦は自信のある様子だった。かすかに笑みを浮かべている。「今にっつてのは、本当にすぐのことだよ。京でも周辺の農村、果ては山奥の村にも、納税をかなり軽くする制度ができるようになってる。一番の問題は税金の高さだ。そうだろう、村長さん」

「そう……ですね。前よりは軽くなりますが、まだまだ厳しいのです。魍魎の被害も同じほど大変です」

「大丈夫、何年かで変わる。村人達が思っているよりも早く、ここにも新しい文化がやってくる。それに何百年も前というのは大げさだ。水晶玉での交信もできる。釣具だって今と昔じゃ全然違う。狩りもそうだろ。昔は狩猟用の弓だって自動で獲物を追いかけてたりしない。それに、列車だってここらを走るようになる」

「列車が？ まさか」村長は疑い深げな顔つきを夏彦に向けた。

「本当です」答えたのは初雁だった。初雁は議論に応じずに、黙々と食事を食べ続け、一番早く平らげてしまった。「列車はあと一年ほどでこの付近を通る予定です。付近の地形調査が済み次第、列車はここを走ります。列車が通るために、手入れに少し時間がかかりますけど、それでも一年ほどです」

「とはいえ、列車は金がかかりますからなあ」

「しかし、近隣に行くのならほとんどかかりません。ここから遙か東北へいくのなら別にして」音桂が言った。

「確かにそうですね」老人は呟くようにそう口にする、ため息をついた。「いやいや、時代は変わっていくものですな。すみません、中央に住まう人々にこんなことを言って。つい、朝廷に対する不満を漏らしてしまいました。気分を害しましたでしょうが、お許しください。ささ、食事を済ませてください。済んだらお部屋に案内します。疲れが癒えるまでごゆっくりなさってください」

老人は去った。

「まあ、大変なんだろうね」夏彦が小声で言い、それから彼は黙々と食事に専念し、酒を飲んだ。

「魑魅魍魎がいるからな。連中から受ける被害も大問題だろうから」音桂が付け足した。

燈籠はこういった問題のことを父親に聞いてみようと思った。夏彦のいうとおり、改善はされるだろう。しかし積極的にやらないと、いつまでも変わらない。

全員の食事が済むと見計らったように女が一人出てきた。若い女だったが太っていて器量も悪い。村長の娘なのだろうかと八人は思い、それからほとんどの者が似てない親子だなと思った。

「さあ、部屋に案内します」

それから女に連れられて男女に分かれて寝室に入り、それぞれ布団に横になった。

「どうぞごゆっくり」

男部屋で一番早く寝たのは八桐とその次に夏彦で、他の三人が驚くほど早く鼾が聞こえて来た。それから初雁が「おやすみ」と小さく言い、軽い寝息を立て始めた。

「燈籠、橋を渡るのには厳しい試練になる。わかっているよな？」音桂が小声で言う。

「そうですね。ひよっとしたら俺達の旅も終わるかもしれない」

「大丈夫。百合桜の術の前には魑魅も手が出ない」

「だといいいけど。俺達も早く寝ましょう。今日は疲れた」

「ああ」音桂はそれから一言も口を聞かず、やがて二人も眠りについていた。

天の橋

浄瑠璃が目を覚ますと葵が寢息を立ててまだ寝ていた。百合桜の姿はもうない。水晶玉を見ると緑に近い色を発している。正午も近い。眠ったおかげで疲労はかなり回復したようだ。まだまだ眠っていたいが、他の連中もすでに起きているかもしれない。しかし葵を起こすのは躊躇われる。かすかな寢息を立てる葵の眠り顔は美しかった。浄瑠璃は葵の頬を軽く叩いた。葵の顔が歪む。さらに軽く叩く。目が開いた。

「おはよう」浄瑠璃は優しい顔で声をかけた。

「おはよう」葵は半眼でそう返し、またもや眠りにつこうとした。

「起きて葵。今日もまた歩かなきゃいけないんだから」

葵はそういわれて渋々と上半身を起こした。「なんだかだるい」

二人は寝巻きから用意されていた新しい旅衣装に着替えた。居間にいくと燈籠と音桂、百合桜、それに夏彦の姿があった。

「おはよう」燈籠が挨拶をする。

「おはようございます」浄瑠璃が挨拶を返した。

「あとは八桐と初雁か」夏彦が言う。

浄瑠璃と葵は用意された食事を平らげた。昨日の食事に比べればずっと質素なものだった。

「出立はいつに？」村長が聞く。

「全員の準備が整い次第出ます」燈籠が答えた。

八桐と初雁が夏彦にたたき起こされたようだ。二人とも実に眠い、という様子で入ってきて、食事を取り始めた。

やがて、全員の準備が整った。八人は村長に礼を言った。

「お気をつけて。山越えが上手くいけば、天の橋を渡るでしょう。

あそこは当然のように魔物が飛び回っています。覚悟しているとは思いますが、魍魎退治は避けては通れませんでしょう」

「どんな妖魔が出ようと、刀の錆にしてやりますよ」燈籠は意気揚

々と答えた。

村長は力なく笑った。「あなたがたのような若者が命を落とすというのは、実に悲しいことです。どうか十分用心して渡るように」村長の言葉に萎縮する者もいた。しかし燈籠はめげなかった。

「大丈夫。一人も欠けることなく渡ります」

一同が出立したのは正午すぎだった。まだまだ日は明るく、昨日のように雨が降る気配は皆無だった。しばらくして、燈籠が立ち止まって振り返った。

「さて、これから俺たちは天満山に向かいます。標高は京で一番高いし、この火の国でもかなりの高さの山だ。当然知ってると思うけど、一応。俺達はその頂近くまでいく」

「今日中に天辺までいくのか？」八桐が聞いた。

「いけますよ。別に、頂上まで歩くわけではないですし」初雁が答えた。

「まあ焦らずに行こう。時間はあるし、普通にいけば余裕で定められた期日までには間に合う」

「他の学舎の連中を当てにするわけにはいかないからな」音桂が言った。

「そうです。じゃ、行こう」

出立した村からはすぐにあるので、天満山の山裾には容易にたどり着いた。天満山は一同を見下ろすかのように高く聳え立っている。頂上付近には雲海がかかっている。これから頂上までの長い登山が始まると思うと一同はうんざりした。快活に進む音桂と燈籠を先導に、八人はためらう脚を進ませていった。

問題は寒さだ、と燈籠は思った。これまでの防寒具では山頂付近の、想像を絶する、凍えるような冷気に耐えられるはずがないのではないか。しかし天の橋を渡った者たちが寒さに対して苦言を呈したことはない。察しはつく。というよりも、やはり天の橋というのは不可思議な空間が支配しているのだろう。燈籠は考えるのを放棄した。

さて、天満山 京最高の高さを誇るその山は今日も優雅に聳え立つ。その腹を歩く脆弱な者たちをあざ笑うが如くに高らかに風の笑いを飛ばし、小さき者たちを脅えさせ、心胆寒がらせた。しかし彼らはそれでも山の頂目指し、遅々とした歩みながらも確実に山頂へと向かっていった。山はそんな彼らに感銘を受けたのか、風を送ることを止め、森に巢食う獰猛な生き物たちをけし掛けることもしなかった。おかげで一同は比較的のびやかに、足の疲れが許す限り登ることができた。

そうして彼らはたどり着くことができた。時刻はすでに遅いが、闇が照らすほど暗くはなっていないかった。鳥が鳴き始める頃に彼らは天満山の山腹にたどり着いた。

「早くつくことができた」燈籠はほっとして、目の前にある偉大な時代の産物を眺めた。それは少しだけ宙に浮かんでいる謎の大きな円盤だ。

「休憩を少なくした甲斐があつたってわけか、燈籠？」嫌味たらしめく夏彦が言う。

「ただどこでゆっくり休める。そして万全の状態で頂上に望めるというわけだよ」音桂が言った。

「ここは寒いわね」葵が呟くように口に出した。

「こんな高いところまでくれば当然よ。でもね、結界を張って、少し暖かくするのはわけないから、心配しなくてもいいわ」百合桜が頼もしく言った。

「そういうわけで、今夜はここで野宿だ。村長から貰った団子の残りを食べてしまおう。燻製肉も一日分だ。明日の分を少しだけ残して、他は全部平らげよう」

「いいのかよ、大将。らしくないぜ」八桐が驚く。

「いいんだよ。橋を渡ったら食料の心配はないんだから」

村長の心づくしは彼らに登山の疲れを忘れさせ、心に潤いをもたらせた。浄瑠璃は学舎の寮で寛ぎ、ゆつくりと菓子を食べている自分を想像した。汚れた服も、優雅な装飾の着物へと変わる。夢のよ

うな心地　しかし吹く風にすぐに現実に戻ってしまった。

「この寒さ！　凍えちゃうよ」初雁が身を震わせる。

「結界を」百合桜が結界を張り、そして明言したように暖をとった。囲炉裏や、炬燵の中で温まるほどではないにしても、薄い布団を被ったほどの暖かさを感じることはできた。まだまだ時間は長かったが、彼らは眠り、夜明けと共に起きた。少ない朝餉は八人の腹を昼まで騙すことができるかどうかと行ったところだった。

食事が済むと八人は自分たちの目の前にある、円盤状の大きな物体をしげしげと眺めた。その物体は黒紫色で、縦幅は将棋の盤ほどの厚みしかなかった。表面には古代文字が立体的に描かれている。円盤は石できていて、ただの石ではない。緻密に、浮力を得る様々な技術が内部に施されている。そしてこれは百年ほど昔からの技術であった。瞬間昇降が生まれたのはさらに五十年もあとのことだ。

「さあ、上に参りましょう」燈籠は悠々とした様子で円盤に乗り、中央に進むとあまり気の進まない、といった様子の七人を招いた。他の七人も乗り込む。最大搭乗数が十二人なので、全員が乗ってもまだまだ空きはある。燈籠が円盤の源力を発動させる呪文を発する（円盤に書いてある文字を読んだ）と、円盤は一度小さく震え、それからゆっくりと上昇していった。上昇と同時に張られた結界によって風を感じることはなかった。

円盤はぐんぐんと速度を増し、浄瑠璃は慌てた。気丈な葵も少し驚いている。

円盤が止まった。作動してからほとんど時間は経っていない。ほんのわずかの間に、一同は天満山の山頂、雲海のかかる高所へと辿りついた。

八人が円盤を降りると、円盤はゆっくりと下へと下がっていった。浄瑠璃は辺りを見回した。木々は少なく、何よりも覆い尽くす雲に思わず見とれてしまう。まるで天国にきたように思える。そして、何よりも彼女を、いや一同全員を魅了したのは雲海に浮かぶように

走る天の橋だった。彼らは天の橋の目の前にいるのだった。山の山頂近く、急な斜面のある場所に橋が渡っている。頑丈に作られた木の足場は何人乗ってもびくともしないほどの作りになっている。橋の横幅は広く、大人五人が横一列に並んでも通れるくらいだ。橋の両端には朱に染まった手すりがある。手すりの下には柵がかなり細かい間隔で設置されており、落ちる心配はないようだった。手すりは平均的な身長 of 燈籠の頭の高さとはほぼ同じ場所があり、浄瑠璃が手を乗せるにはやや高い場所にあった。初雁は外の景色を見るのも苦労しそうだった。

「準備はいい？」橋の目の前に立つ燈籠が静かに言った。

「いいぞ 行こう」夏彦が周りの頷きを確認し、返した。

天の橋を渡る作業が始まったのだが、彼らはどことなくぎこちなく足を進めた。ところどころ立ち止まり、周囲を確認してから、また再び歩き出す。一同は最初から、恐怖を感じていた。

天の橋 二

一体いつからだろうか、人々がこの橋を支配していたのは。この橋がいつできたのか、それを知る者はもうこの世には生きていない。太古の昔に異形となり時を永らえた者たちもすでに朽ち、この偉大なる天の橋群　ひとまとめにすれば世界最長とも云われる橋の作製には何百年を有したのか、今はそれすらわからない。神々からの賜物と信じて疑わない者もいる。人々の思惑をよそに、歳月を重ねても今もなお劣化することなく悠々と橋は架かっていた。

「魔物は出るのか？」八桐が言った。

「噂どおりなら、今すぐ出てもおかしくないんだけど」葵が答える。「襲われることがない年もあったって話だよ。全滅したって年もあったけど」初雁が言う。

燈籠は正面、それから周囲を見渡し、それから思った。考えていた以上に橋渡りは面倒なことになる。雲海、それは霧のようなもの。その霧によって視界を遮られることになる。雲海から突き出ている峰々の頂は美しく、雄大な光景であった。しかしこの高所を占拠しているのは人間ではないのだ。

「きついな」燈籠は誰に聞こえるわけでもない声でそう呟いた。

峰の頂につき、一同はそこで警戒しつつほんの少し足を休め、少し下り新たな橋を渡り始めた。今のところ、魑魅魍魎の気配はない。山々を越える旅は懸念がなければ面白く、快適ではあった。雲海のかかっている場所を通り、下を見ると浄瑠璃は失神しそうになった。初雁も足を震わせて、夏彦に押されるように進むこととなった。

燈籠の顔は穏やかではなかった。彼は足を進めるほどに厳しい顔つきになっていった。

天の橋群の中でも一番長い、天の大橋と呼ばれる橋について。その大橋はやはり朱色に塗られ、床はこれまでの木製とは違い、鉄で

黒く塗られていた。橋の手前には鳥居があり、鳥居の上には鬼の面が象つてあつた。一同を不安にさせるには十分すぎるほど、恐ろしい面だつた。橋は霧によつて視界を遮られている。一同が鳥居を越えると、甲高い叫び声が聴こえた。怪鳥の叫び声のようだつた。彼らは足を止めた。

「血の匂いがする」音桂が呟いた。

「血の」燈籠が小さく呟く。霧の中に戦いが待っているということ、彼は理解していた。「妖魔の類がいるな。気をつけて進んでくれ」燈籠は刀を抜いた。霧の中、銀色の光が鈍く光つた。

燈籠の空気が変わったことに音桂が気づいた。

橋に足をかける。鉄の橋は軋む音がしないが、金属の感触は彼らは気に入らなかつた。

羽音が大きくなる。音桂と葵が弓を構えた。夏彦と八桐が刀を構える。初雁も、姿に合わない刀を構える。浄瑠璃は小刀を持つているが、自分には扱えないことがわかつていたのでじつと様子を見ていた。

燈籠が刀を構え、霧の中へ向かつていく。たちまち、大きな羽音が聞こえ、一匹の怪物が影を出し、それから姿を現した。鴉人かあひんともいわれる妖魔で、大きく、青と黒の混じつた翼を持ち、汚らしい茶色い羽毛に覆われている。口は嘴のような、犬の鼻面のように伸びている。手の鉤爪は醜く尖つている。黒い鱗に覆われている細い足にも尖つた爪を生やしている。掴まれたら危険だ。鳥人は燈籠に向かつてきたが、燈籠はするどく刀を振り、相手の体を斜めに斬つた。怪物は床に落ちる。

音桂の弓が霧の中にいる影を射つた。悲鳴が上がる。

燈籠が気配を感じて振り返ると、すぐ後ろに浄瑠璃がいた。

「危ない。下がつてろ！」

燈籠の声に浄瑠璃はすすこと引き下がった。本心では燈籠のすぐ側にいたかつた。彼だけを危険な場所に置くのは、浄瑠璃の本能が許さなかつた。浄瑠璃の必死な思いも、今の殺気だつた男たちに

は不可思議で邪魔な行動だった。

葵は浄瑠璃の行動を笑わなかった。彼女は友人と友人の全てである燈籠を守るため、弓をたがえた。音桂にも負けない彼女の矢は、影を捉えるなり弓から離れ、悲鳴を發せた。

「見事」發したのは音桂だった。

「まだまだ」葵は口元に笑みを浮かべた。彼女の本能は戦いを求め、今まで鍛え上げた弓の術を誇示したがっていた。葵は武術に優れている。戦いになれば鬼神のように、戦いの女神のように戦うだろう。そんな彼女の評判を、彼女はその通りにしたかった。

葵の弓がさらに飛ぶ。悲鳴が上がる。葵は微笑んでいる。葵は接近戦になれば、すぐさま薙刀に切り替えることができる。まさに、今の葵は燃え上がっていた。

夏彦は刀を構え敵の襲撃に備えている。彼もまた、殺気立ち、戦いに思いを滾らせていた。夏彦の剣の腕はこの中では一番で、燈籠よりも優れている。彼は燈籠の前に立ち、鴉人たちが襲い掛かるのを待ち構えた。音桂と葵の弓、百合桜の術を頼りにしているとはいえ、彼自身は襲い掛かれても返り討ちにする自身があった。彼もまた葵同様、戦いによって熱く血が滾っていた。

鴉人が夏彦目掛けて襲いかかってきた。魍魎とはいえ、霧は彼ら自身の視覚すら惑わす。しかし彼らの聴覚は人間の比ではない。一瞬にして夏彦の足音を捉え、襲い掛かってきたのだ。

夏彦は動揺しなかった。

夏彦は燈籠同様、怪物を一刀両断にした。見事な一太刀だった。一方、百合桜は術を使ったものか思案していた。相手が見えない限り、術は使えない。かといって、術を施すところには事態は深刻なものになるだろう。自分がもっと術の腕は上等であったらと思うが、術とはこういうものだ。様々な条件が上手く重ならない限り、術は成功しない。それらの条件を満たすには、前衛たちに頑張ってもらうしかない。

霧の中を飛びかう鴉人たちは複数いた。数は十を越えている。燈

臙、夏彦、八桐が前衛に立ち、襲い掛かってくる物の怪を切り伏せる。葵と音桂の矢の補助攻撃は実に頼もしいものだった。

物の怪たちが近寄らなくなった。声から察するに、まだまだ霧の中には無数の鴉人がいそうだ。彼らは頭もよく、八人が脅威となることを仲間の死で十分に理解したようだ。

百合桜は術の詠唱をしているが、彼女は不用意な術で相手を怒らせるのを避けることにした。その代わり、前衛の三人の前に炎の壁を作った。気休めだが、正面からくる敵に対し、相手を躊躇させるほどの偽の炎を作り出して見せた。

怪鳥たちは彼らに対し攻撃を仕掛けるのを止めたようだった。凄まじい羽音の数が遠ざかっていく。

炎の壁が消えた。燈籠たちはさらに先へ進んだ。霧が濃い。百合桜は周囲に空間を歪めてみせる術を施したが、これも気休めだった。移動しながら術を行うのは高度なことなので、彼女にはこれが精一杯だった。

霧の中から黒い物体が橋の正面に姿を現した。それは彼らの倍はある巨大な生き物で、節瘤だらけの灰色の皮膚をしていた。肥満体で、二本の脂肪の膨れた足を使ってゆっくりと移動している。

顔には黄色い小さな目があり、人に似ているが、明らかに人とは異質なるものだった。

八人にうち誰もがその怪物の名を知らなかった。山々には自分たちの知らない、おぞましい怪物がいることを彼らは知識としてだけ知っていた。

接近して斬りつけるには躊躇われた。怪物は大きく、太い腕に大きな木槌を持っているのだ。鬼のように高等な物の怪ではないにしても、武器を持つ怪物はいる。これもその一種のようだ。

弓が彼の左肩に刺さったが、怯んだ様子はない。逆に怯んだのは矢を放った音桂のほうだった。

葵も続けて怪物の頭部を狙った。こめかみに矢が刺さったが、怪物は動じなかった。

八人は対処に困り、じりじりと近寄る怪物に対し、後方に下がることしかできなかつた。

百合桜は刻みの術を発した。生き物を見えない刃で刻む術は、鎌鼬とも云われる。怪物に対し致命的な効果はなかつたものの、全身を刻まれ、黒い血を出した怪物は明らかに怯み、近づくのをやめた。「射続けて」百合桜が命令した。

葵と音桂はとにかく、矢を射続けた。怪物はその攻撃で致命的な外傷を受けることはなかつたが、鬱陶しく感じたようだ。背中を見せて橋の奥へと向かっていく。

葵と音桂はその背後に弓を射ることができなかつた。二人は矢を全て使い果たしていた。

「岩みたいな皮膚だ。あんな化物がいるなんて知らなかつた」怪物が霧の中に消えると音桂が呟いた。

「だけどうする？ あいつが橋からどかないと、俺達通れないぞ」夏彦が言う。

「急いであいつを追いやるしかないだろ。矢はもうないんだ。鳥の化物に襲われたら一たまりもないぞ」燈籠が言った。

八人は霧の中に紛れた怪物を追った。化物鳥が周囲を飛んでいる戻ってきたようだ。手ひどい目にあいながらも獲物は逃したくないようだった。弓が使い物にならないことがわかったら一斉に襲い掛かってくるだろう。

怪物は醜く太った体を精一杯動かして逃げていく。動きを止めようとすると百合桜の術が放たれ、怪物はすぐに動き出す。橋には一定の間隔で休憩地点があり、そこだけは幅広であり、怪物の脇を無事に横切りには最適と思われた。怪物はその一つにたどり着くと端に身を寄せた。一同はそれを逃さず一気に休憩地点を駆けて怪物をやり過ごした。

「あんなのがいてよく橋が崩れないな」夏彦が走りながら軽口を叩いた。

怪鳥の襲来の第二波が迫ってきていた。矢を全て失った葵は薙刀

を振るって鳥の胸を突き刺した。音桂も剣で戦った。弓に比べて音桂は剣の腕が劣っていることを自覚しているため、彼はできるだけ後方で浄瑠璃や百合桜を援護することにした。

怪鳥たちを片付け、さらに橋の奥へ。第二の休憩地点を通過し、さらに先へとひた走る。

「突っ走れ、休憩なんてしてられない」燈籠は叫んだが、それでも橋は長すぎたので彼らは次の休憩地点で少し体を休めることにした。卓と椅子があるが座るほどの余裕はない。

「話通りだと橋は後半分ほどの長さがあるはず」荒い息を継ぎ、初雁が言った。

「まだまだ鳥の鳴き声が聴こえるぜ」八桐が言う。

誰もがこの状況に不安を覚えていた。全滅の可能性があるのは明らかだったからだ。

「皆怪我はないな。無事だな？」燈籠が安否を確認する。

「平気です」浄瑠璃がこたえる。

「大丈夫」百合桜。

「少し嘴が当たった程度だ」音桂が腕を見せた。血が出ているが、かすり傷だった。葵が包帯を巻いてやった。

「ありがとう」

怪鳥の鳴き声は止まない。

「よし行こう。まとまっていくぞ。前は俺と夏彦。後方は葵、八桐先輩、音桂先輩で対処してください」

第四休憩地点まで通過した。霧が少し薄れてきた。周囲の視界がかなりよくなる。それにつれて、敵の数も把握でき、彼らは防衛戦に徹していたら餌食になるということを一瞬に理解した。

「戦いながらも動くんだ。立ち止まって対処できる数じゃない」燈籠が命じた。

怪鳥たちは一同を取り囲んだ。燈籠は背後を後衛に任せ、自分に襲い掛かる敵に対し、刀を振るった。見事な太刀に攻撃を躊躇するものもいた。

前衛の守備は比較的高かった。燈籠も、夏彦も迫りくる敵を確実に対処できた。しかし後方は八桐と音桂の剣が鈍っていた。八桐は疲労していた。音桂は迫りくる敵の攻撃に十分対処できないでいる。葵の薙刀が彼らを支えていた。葵が一振り、一突きすると敵は苦しいのた打ち回り飛びまわり、雲海の下へと自ら落ちていった。

八桐が鈍い悲鳴を上げた。怪物の嘴が右肩に刺さったのだ。葵はすぐにその怪物を刺し殺した。

燈籠の前に鳥が迫っていた。鳥は足爪で燈籠の右腕を掴み、刀を振るえなくさせた。それから嘴を振るってきた。たまたま、葵がそれを目撃していた。助けようにも葵は燈籠から離れている。

「危ない！」葵は叫ぶ。

しかし燈籠はそのとき、白い煙となった。嘴で突いた怪鳥も様子が変だと気づいて攻撃をやめたが、夏彦が怪鳥を背後から斬った。

怪鳥は倒れた。燈籠はというと、先ほどまでいた場所のすぐ左隣にいた。葵は目を疑ったが、敵が迫ってきたのでそれに気を取られた。百合桜の術が作動した。光の矢が四方八方に飛び出し、周りを囲む翼を持つ怪物に突き刺さった。

「さあ！」百合桜が叫ぶと、一同は全速力で走り、第五、第六の休憩地点を越え、そのまま橋を越えることに成功した。

霧は晴れ、青空が見えた。澄んだ空だった。

「やったな！」夏彦が叫び、燈籠と手を叩き合わせた。

天の大橋渡りに成功したのだ。

山賊の襲撃

それからはさくさくと進み、彼ら八人はどこまでも続く橋を渡る旅をやめ、目的地の山を下山した。昇降場がないのが不便だったが、山は天満山ほど高くはなかった。しかし途中で夜になり、一同は休むことにした。問題の食料は山小屋で調達することができた。彼らはそこで宿泊した。粗末な風呂もあり、一同は村で休んだときほどではないが、まずまずの休息をすることができた。食事は質素なものであったが。

「まあ、今日はゆっくり休むことだな」音桂が八桐に言った。八桐の肩には包帯が巻かれていた。「傷はさほど深くないし、一日二日で治るさ」音桂は自分の腕を見た。怪我の痛みはすっかりなく、包帯も無くてもいいだろうと思えるほどだった。

「俺だけこんな怪我を負うってのは納得いかねえな」八桐が肩をさすりながら言った。

「それは八桐先輩、あなたの剣の腕がいまいちつてこと。そうだよな燈籠？」夏彦の顔は酒ですっかり赤くなっていた。

「まあ、そういうことかな」今回は燈籠も酒を呑んでいた。ほろ酔い気分に浸っている燈籠はいつもより夏彦と打ち解けて見えた。

「俺を見るよ。傷一つ受けなかった。あんなに数がいたつてのにさ。この俺の剣に敵うわけがないってことさ。そうだろ燈籠？」

「そうだな」燈籠は深く考えずに同意した。

葵はちらちらと燈籠を見ていた。彼女には橋での戦いのことがひっかかっていた。燈籠は明らかに怪鳥に攻撃を受けた……しかし、彼は白い煙となつてかのように消えた。

何かの術？ 燈籠が術を使えるとは知らなかった。しかし。

少し前から葵は燈籠に対して含みがあった。彼は先導の立場にいるし、剣の腕はなかなかに見事ではある。しかし、それだけだ。術も使えない。弓もおそらく扱えないだろう。取り立てて褒められる

のは剣だけで、それも夏彦のほうで勝っているようにも思える。

そんな彼が七人を引つ張っていけるだろうか？ 彼女はそう考え
ていた。それは、浄瑠璃のこともあるかもしれない。彼女がそれほ
どまで入れ込む相手は、それなりの人物ではないと、といういらぬ
思い込みもあった。

「百合桜」葵は隣の百合桜に声をかけた。

「何？」

「あなた燈籠殿に対して何か術を使った？ 橋のときだけ」

「いいえ。何も」百合桜は首を振った。「あたしが使ったのは個人
に特定したものじゃないわ」

「そうよね……例えば、人を煙にして相手を惑わすっていう術が使
えたりする？」

「幻視の術ならそういうこともできるけど、今日そんな術を使った
覚えはないわ」

葵は首をかしげた。

「何故？」

「いえ、別に」

しかし葵はやはり、百合桜が知らないうちに術を使って自分でも
覚えていないのだろうと

勝手に思い込むことにした。そのとき術の詠唱で百合桜が周囲を把
握していないということ

はわかっていても。

「いい勲章になるな」八桐が傷跡を見ながら呟いた。

「勲章？」と夏彦。

「果敢に戦った証だ。学舎の女はみんな俺になびくぞ」

夏彦は呆れたよう顔をした。

葵は浄瑠璃に話かけようとした。しかし浄瑠璃は燈籠を見ていた。
葵は燈籠を睨んだ。燈籠は葵に睨まれるとわかり、不思議そうにし
つつも顔をそらした。

葵は浄瑠璃のほうを向く。彼女は輝く瞳で真っ直ぐ燈籠を見てい

る。何だか眩しく光るものでも見ているようで、燈籠はまたも目をそらした。

燈籠の評価はまだ葵にはまだ定められなかった。しかしその顔は、誰よりも美しかった。それだけは認めていて、葵は長く見ていると骨抜きにされそうな思いにかられて慌てて見るのを止めた。

「もう寝よう。みんな疲れただろ。明日に備えよう」音桂の号令で八人は寝室に向かった。

疲れたのか、皆布団に包まるとすぐに寝てしまった。

辰の刻には全員起きていた。浄瑠璃が七番目に起き、最後は初雁だった。準備を整えると外に出た。

「さて、これから先また山道を通る。山を二つ越え、山の麓にある村に泊まる。今日中にそこまでいけるはずだ。それから、その次はいよいよ阿高山につく。教師たちが恐れていた一番の山場も越えた。これから先は比較的楽になると思う。だけど油断は禁物だな。それじゃ、出発しよう」燈籠の説明も終わり、一同は足を進ませた。

三つに枝分かれた道の中央を進む。

「教頭が言つてたところだ。中央を進まないといけないんだよな」夏彦が確認する。

「そうだ」音桂が答えた。

「楽な道であつてくれよ」八桐が言った。みな同じ気持ちだった。時刻も過ぎていくと日は高く昇り、穏やかな気持ちのいい秋のどかな空になった。青空を遮るものはなく、鳥が鳴き、鹿が森の中で草を食んでいる。

「のどかだなあ」音桂が愉快そうに呟いた。

「ここらでしばらく休んでいきたいな。うつつけな場所だ」と初雁。

「なら、少し休憩にするか」燈籠が提案した。

「へえ、大将にしては珍しいな」八桐はそういいながらも木に腰掛け、握り飯を取り出して食べ始めた。

「あやし達も食べよ」浄瑠璃が葵に言った。

「そうね」

食事の時間は淡々と過ぎていったが、心地のよい風、景色を眺めているだけで一同の疲れは癒され、朗らかな気分になっていた。

馬の足音が聞こえてきたとき、一同は声を静めて耳を澄ませた。馬は複数で、段々とこちらに近づいていた。

八人は木の茂みに身を隠して息を潜めた。馬の音がはつきりと聴こえてくる。かなりの数だ。二十頭ほどだろうか。先頭とその周りには鎧を着込んだ男達、その後ろにみすばらしい身なりの男たちが列をなしていた。刀と弓を持っている。

「野伏せりだ」音桂が小さく呟いた。

馬の集団は去っていった。

「あの数なら、小さな村は一たまりもないわね」葵がいう。

「冗談じゃねえ。あんな数相手にしてられないぞ」八桐がいう。

燈籠が首を振った。「今は山賊狩りをしているときじゃない。残念ながら、ね」

とはいえ、言動とは裏腹に燈籠の心の中で強い闘争心が渦巻いていた。それは葵もそうだった。彼女は山賊が嫌いだ。山賊狩りをすることに躊躇いはない。

「だけど……目指している村と同じ方向に連中は向かっていった」初雁がいう。

「そのようだな」音桂が同意する。

一同は茂みから身を出した。

「ともかく村に向かおう」燈籠がいった。

一行は歩き出した。心地よかった風が不吉を運ぶ便りのように感じられる。晴れた天気はもう彼らの心を陽気にはしなかった。

一難去ってまた一難か。初雁は太陽を恨めしそうに仰いだ。直射を見て彼は目を瞑った。やはり自分は運が悪いと彼は思う。この参拜巡りに選ばれたのがいい例だ。明らかに戦いの術を知っていたほうが生き残る可能性の高いこの旅には自分は全くの役立たずだ。三人の女が全員美女なのが救いだけだ。このまま平穩に参拝が済めばいいのだが、そももいくまい。

足が鈍る。やはり気が重い。十中八九、この先で待ち受けていることが予想できる。百合桜のような多彩で派手な術の使えない初雁が唯一得意とするのが先見の明だ。彼にはその力があるが、それは

占術の一つで、一流の占い師なら必ず有している能力であった。彼はその能力を他の誰にもいつていなかった。

彼の直感が、あまりよくないことが起こるといつていた。なるようになるだろう、彼は心の中で呟いた。

しかし案の定、争いの声が聞こえてきた。一同は燃えている民家を見た。その先に轟きが聴こえてくる。

燈籠が刀を抜いた。「やるべきか？ 音桂先輩」

音桂は弓を構える。「京の民を守るのも我らの役目だな」

「そうかな？」夏彦はそう言いながらも刀を抜いていた。その目は挑戦的な輝きを帯びていた。

葵も弓を構える。山小屋で頂いた矢は狩り用に使うらしい、葵や音桂なら見てすぐに粗悪なものだとわかるものだったが、葵はかえってそれでよかったと思っただ。山賊を射るのは獣を狩ることより安いことだということになるからだ。葵は弓を射るのが待ち遠しくなった。

さて、燈籠は少しためらいがあった。相手は山賊だ。山の戦い方を心得ている。野蠻で下劣な連中とはいえ、戦い方を知らないわけではないはずだ。こちらの数は少ない。心してかかる必要がある。

それに本来の目的は山賊退治ではないのだ。ここで目的を達成できないような事態になったら京の一大事だ。心構えとして、他の学び舎の連中を当てにしてはならない。

馬の駆ける音が激しくなる。人々の悲鳴。逃げ惑う村人達がこちらにやってきた。

助けを求める悲鳴を上げながら一人の男が燈籠の前で倒れた。背中に矢が刺さっている。

山賊たちがこちらに気づいた。矢が放たれる。しかしすぐに彼らの頭に矢が刺さった。あつというまに三人の山賊が地に伏せた。起き上がることはない。

浄瑠璃は葵を見た。葵は人を殺した。しかし、葵は平然と、毅然

とした顔でいる。

夏彦が刀を構えながら猛然と村の中央に向けて走っていく。それを真似て八桐も。そして少し慎重さを見せながら燈籠も走る。他の五人も続く。

村の中央は開けた場所で、会合や踊りなどをするのに適しているように見えた。今は多くの村人が血を流して倒れている。

夏彦はすでに三人の山賊を斬っていた。彼は何かが憑りついたかのように刀を構えた山賊たちの真っ只中に突っ走り、向かってくる相手を斬っていった。遅れて燈籠と八桐も加勢し、彼らの功績で広場の山賊はほとんどいなくなっていた。

馬に乗った山賊たちが夏彦たちに迫ったが、葵と音桂の弓、そして百合桜の幻視の術で彼らは退散していった。

馬たちの蹄の音が遠ざかると、一気に静かになった。

「なんだ、もう終わりか。あっけない」

夏彦は刀をしまおうとしたが、またもや悲鳴が聞こえてきた。

「まだみたいだぞ」燈籠は悲鳴の上がったほうへ疾駆する。

村はあちこち焼かれていて、木の焦げる匂いが立ち込めていた。燃え上がる家を見ると山賊たちへの怒りが強まっていく。京の平和か。参拜も大事だが、下劣な山賊たちを退治するのも同じくらい重要だと思った。目の前に死体。躊躇してられない。彼はそれを飛び越え、駆け抜けていく。

村の南東に山賊たちがいた。彼らは松明で家を焼き払っている。そして地面に膝をついてそれを呆然と眺める村人を見てあざ笑ひ、蹴り飛ばしている。女の悲鳴。先ほどの山賊たちより遙かに数が多い。馬の数も多い。

燈籠は躊躇した。馬上の敵とは戦いにくい。数も多い。戦うにしても全てとやりあうのは無理だと彼は判断する。

燈籠に追いついた状況を見ると葵はためらうことなく矢を放とうとした。

「待った！」燈籠は葵の勢いを止めた。

「全部仕留めない！」

「駄目だ。数が多すぎる」

「でも村人を救わないと」

葵は激しく燈籠を睨んだ。

「ここで全滅したら、京が駄目になるかもしれないんだ」

「だけど山賊たちが！」葵は叫び、それから少しだけ冷静を取り戻した。彼女は深呼吸した。

「奴ら、略奪を終えたみたいだな」夏彦が言った。

山賊たちは逃げ惑う村人たちを尻目に馬を走らせ、村の外へと疾駆していった。引き際の速さは見事なもので、あっという間に馬足は聞こえなくなった。

「俺達の泊まる場所は残ってるのかよ」八桐が呟いた。

燈籠たちは村人たちと一緒に焼かれた家を壊したり、傷害や火傷を負った村人達の手当てを手伝った。ここで才を発揮したのは百合桜の癒しの術だった。他の者も自分達のもつ知識を使って、互いに助け合い、医療に詳しい者の指示を仰ぎながら助けていった。

八桐は村人達を半ば傍観者のような気分で見ていた。彼らが傷つこうが死のうが、さほど興味はない。だが女なら別だ。特に美人だつたらなおさらだ。

それで彼は今、垢抜けないが、それでもなかなかの顔立ちをした少女の腕に包帯を巻いてあげていた。その心に下心を持ちながら彼は優しい声で介抱する。

「ありがとうございます」

少女は八桐よりいくらか若く見えた。

「年は幾つだい？」

「十五になります」

十五か。全く問題ない。

「旅の方なんですか？」

「参拝者だ。この時期だからな、わかるだろ？」

少女は首をかしげた。

「まあ、どうでもいいことだからな。そうだよ、旅の者だよ」

「どちらまで？」

「もう少し東にだ。さあ、もういいだろ。あとは足だな」

少女の細足には軽いが、裂け傷があった。生々しいその傷に消毒液を塗ると少女はびくりと体を震わせた。八桐は構わずに少女の傷跡を洗い、包帯をする。

「これでいいだろ。家まで送つてこよう。家は無事なのか？」

「はい」

八桐は少女を支えて歩きながら、湧き上がる猛りを楽しんでいた。

燈籠と葵や音桂も怪我人の治療に尽力した。百合桜は治療の術を使えるが、彼女は消毒や包帯を巻く作業のみを行った。治療の術は術の初級者でも扱える。初級の術が扱えるのは京内ではほぼ貴族のみで、一般人は医術を学ぶ。医術と妖術における治療とに雲泥の差はない。妖術の場合、術者は善なる気を絶えず患者に送りこむ。それは心身ともに非常に疲弊する作業で、集中力と体力が要求される大仕事だ。効率のいいものではない。怪我を負った人間が一人なら術を施すべきだろうが、なにしろ数が数だ。治療は人の回復力に任せることにした。

燈籠はふと、浄瑠璃が傷つき倒れた男の側にいるのを見た。近寄ってみると、彼女は傷ついた男の腕を握っていた。男の腕は刀での切り傷が見られた。

燈籠は彼女が術を施しているということを理解した。

「君は治療の術ができるんだ？」燈籠は意外な思いでそう尋ねた。燈籠の声に浄瑠璃は振りかえった。浄瑠璃の顔は曇っていて、そして睨みつけるかのように燈籠を見た。

浄瑠璃が立ち上がった。威押されるかのように燈籠は後退した。「人を殺すことだけが人の成す術^{すべ}ではないですもの」

燈籠は動揺した。浄瑠璃の目がまるで、哀れみを込めているように見えたのだ。

浄瑠璃は燈籠に背をむけ、再び村人の治療に専念した。

燈籠の頭の中はしばし混乱していた。燈籠が考え付いたのは、きっと彼女は傷つき倒れた村人達を見て、山賊たちに対しての憤りを隠せなかったのだろうということだった。村人たちに対し深く同情を覚えたのだろう。だがしかし、それが燈籠に直接向けられたような気がしたのは何故だろう。

燈籠は彼女から離れ、そして村人の傷に包帯を巻きつけながらさらに深くそのことを考えた。そして彼は自分が新しいことをしたことをふと思い出した。

自分は人を殺めたということ。そしてそのことに対し何も感じていなかった。

燈籠は首を振った。相手は山賊だ。

しかし、同じ人間だった。燈籠は思う。これには理由があるはずだ。人を殺めたのに、そのことに対し思い至らないのは畜生のなす業だ。相手がたとえ悪党であつても。

燈籠は浄瑠璃を見る。彼女は、自分が人を殺めたことに対し平然としていることに呆れてしまったのかも知れない。

これまでのことを思う。始めに、狼を斬った。初めての殺生だった。そのことに対し何も思い至らないのは至極当然と思う。あの状況では殺しの罪悪についてなど考えてはいられなかったから。

次に怪鳥を斬った。あれは妖魔の類である。それに状況は同様だ。やるか、やられるかの場合だ。

そして山賊を斬った。

燈籠は村人に包帯を巻いてやった。相手の謝礼があつたが、それは耳に入らなかつた。彼はのろのろとした動作で山賊たちの死体の前まで向かつた。近寄るとたかつていた鳥が飛んだ。山賊の死体は無残だった。斬られ傷、弓での傷。血だらけの死体。無念そうな目。半端に開いた口。

燈籠は思う。死んでしまつたら、それは仏になる。善も悪もない。これ以上、彼らを冒瀆はできないのだ。

「燈籠殿？」背後に葵がいた。葵は山賊の死体を軽蔑的な目で見た。「げすな連中の末路は烏の餌がお似合いでしょうね」

燈籠は振り返った。葵の顔は美しかったが、その目は冷ややかで、燈籠はざわめくものを感じた。

「そんなことを言つてはいけないな」

葵が驚き、そして傷ついた顔になつた。「何故？　これらはどうなつて当然の連中たちでしょう」

葵の勢いの強さに少したじろいだだが、燈籠は首を振った。「彼らを埋めてあげよう。村人の仏と一緒にでは彼らが納得しないだろうか

ら、別々で。森の中がいいだろうな」

葵は信じられないといった顔をしていた。

いつの間にか音桂と夏彦それに初雁がきていた。

「彼らを埋めるんだ。手伝ってくれ」

「ま、死人に罪はないものな」夏彦の目は憂いを帯びていた。

「手伝います」初雁が言った。

葵は呆然とした様子で彼らを見ていた。

作業の途中で燈籠が辺りを見回すと、葵はいつの間にかいなくなっていた。

日が暮れるころ、様々な作業は中断され、村の人々は家々に入っていた。家がないものは中央にある大きな村長の家に。燈籠たちがそこに泊まる予定ではあったが、山賊たちの蛮行により参拝人たちの泊まる場所はなくなってしまった。

「あなた方は村の危機に対し救いの手をさしのべてくれた」村長は年老けた小柄の男で、蓄えた真つ白な髭が首の下まで伸びていた。

「重大な使命のことも省みずに。私の家はあなた方が休める場所がありません。なので休む場所は他に設けました。そこへ案内しましょう」

彼らは村長についていった。村の広場から離れて、寂しい場所に向かっていく。

「山賊たちも埋葬したそうですね？」村長が尋ねてきた。

「多大なる被害を受けたあなた方には気に入らない処置かもしれないが、せんが」音桂が答える。

村長は首を振った。「まあ……村の者たちの中には彼らが死んでも許せないという者もいるでしょう。埋葬された死体が再び掘り返されるということもあるということです」

「それはそれで仕方ないことなのでしょう。私は私の思うようにやっただけですから」燈籠が応じる。

八人は村はずれにある二つの家に向かった。そこには二人の男女

が待ち構えていた。おそらく夫婦なのだろうと参拝人たちは予想をつける

「お待ちしておりました。ささ、どうぞ中に。男女別々になっております。こちらが殿方。こちらがお嬢様方の泊まる場所です」

「参拝最後の村での休息、ごゆるりとどうぞ」村長はそういつて去っていった。

八人は男女別に別れた。燈籠たち男らは藁葺きの二階建てという村の中では異質なほど大きな家だった。家中はなかなか快適そうな空間だった。中年の日に焼けた小男に案内されて横長の食卓のある部屋へと入る。風呂場の場所を伝えた後に村長の別れの言葉とほぼ同じ言葉を伝えた後に男は部屋から出て行った。風呂場は狭いのて一人ずつしか入れない。彼らは一人ずつ風呂に入り、汚れを洗い落とした。ゆったりとした気分は彼らの気持ちを少しだけ陽気なものにした。

音桂が最後に出て、五人は食卓を囲んでくつろいだ。

夏彦があーと声を出した。そして同意を求めるように「疲れたな」と言った。

「今日は、なんだか嫌な日だった。人を殺めるなんて行為は初めてだったから」音桂が言った。

「でもよ、俺たちは正義だろ？」八桐は壁に背を預ける。

「正義なんて自分たちの価値観でしかないんだ」そういつたのは燈籠だった。

「俺たちは間違ってるってことかよ？」八桐が食って掛かる。

「間違いも正しいもありません。自分たちの行為が正しいと信じて判断したんでしょう。いいじゃないですか。罪を憎んで人を憎まずです。山賊の行為そのものは最低だし、その行為を中断させようとするのは当然だと思います。結果的に死人がでましたが」と初雁が言う。

「だけどまさかこの旅で山賊退治までするとはなあ。ついてないなあ」夏彦がしみじみと言う。

「学舎に戻れば自慢できるさ。俺たちに憧れる連中がたくさんで
だろうな」言ったのは音桂だ。

「なんかさ、その発想は八桐先輩ですよ」

夏彦がいうと音桂は苦笑した。

再び男が現れた。大きな盆を持っている。盆の上には皿が複数載
つていて、皿の上には当然料理が載っていた。一日の締めくくりに
ふさわしい、食欲をそそるいい香りが匂ってきた。けど酒がな
かった。それらは不満ではあったが、本来彼らは酒の飲める身分では
ないのだ。仕方のないことかもしれないが、村の危機を救うのに一
役買ったにしては……と不満がる者もいた。

「いいじゃないか。元々もつと厳しい覚悟で迎えなくてはいけない
旅だ。馳走にありつけるだけありがたいと思わないと」燈籠が諭し
た。

食事はうまかった。山菜料理もあれば近くの川で捕れたという魚
料理もある。そして熊鍋。熊の肉を食べるのは初めての経験で、思
ったほど臭みもなく、それほど硬くなく、食べやすかった。

「おいしいものね」百合桜が至福の笑みを浮かべた。

「どれもおいしい」葵はご満悦だ。

「鹿もうまかったけどこれもうまいですね」初雁が幸福そうな顔で
感想を漏らす。

「そついやまだ熊に遭遇してないな」夏彦が言う。

「百合桜がいるんだ。熊が可哀想だ」音桂が返した。

「それで、明日はどうするんだ、大将」八桐が聞いた。

八桐の問いに燈籠は姿勢を正し、真剣な顔つきになった。

「最終工程です。籾馬山を超えて、そのまま阿高山に。明日明後日
は足の限界まで歩くから、そのつもりで」

八桐はうんざりといったしかめ面をした。

「最後の土壇場だ。今まで全員無事でここまでできた。最後まで気を
抜いたら駄目だ」

「それで、いつ頃立とうか」音桂が言う。

「巴の頃までには。今日はみんな疲れているだろうし、睡眠はか
り必要になると思うから。食べたらずくに寝たほうがいいのかもし
れない」

食事を終えると彼らは二階の寝室に案内してもらい、予め用意さ
れた寢床にそれぞれ入り、すぐに眠りはじめた。戌の刻に入ったば
かりだった。隣の家では浄瑠璃たちも同じころに眠りについていた。
彼女たちも明日も過酷な日になるという覚悟はあった。不安ながら
も、穏やかな眠りについていた。

山賊の襲撃 四

しかし一人だけ起きている者がいた。その者は暗がりの中、周囲の気配を探りつつ様子を見ていた。それは八桐だった。正確にいうと彼は少しだけ寝て、真夜中に起きた。彼は全員が眠っているのを確認するところそりと起き、音を立てずに階段を下りて、外に向かった。外は真つ暗だったが、彼は猛然と村の広場のほうまで向かっていく。彼は介抱した少女の家に向かっていた。目的は、少女を強姦することだった。しかし場合によっては和姦になるかもしれない。少女も村を救った旅人とわかれば黙って股を開くだろう、と八桐は考えていた。

八桐が今回の旅で一番の不安材料は女を抱けないということだった。最初は一緒に同行する浄瑠璃らが彼の相手をしてくれるだろうと考えていた。しかし、どうもそういう雰囲気にはなれそうもなかった。燈籠や音桂などにばれたらまずいことになると思っていたし、葵や百合桜などは力で訴えても敵いそうもない相手だった。誘いにも乗ってこないだろう。経験上あの手の女たちはお堅いとわかってきた。

なら別に女を調達する必要がある。夜鷹、色町。しかし夜鷹はどこにも見えないし、こんな山奥に遊郭があるわけでもない。

八桐は昂ぶる思いをもはや抑えることができなかった。なんとしても女を捜さねば。

少女の家の前に来た。彼女がこの家に入ってくるのは当然、確認済みだ。しかし、いざ民家に侵入しようとする、とたんに臆病風に吹かれた。というよりも、これは明らかに犯罪だ。

八桐は諦めた。昂ぶる思いも夜風に当たり、しだいに薄れていった。しかし、彼はそれでもなお諦めきれない思いに心を乱された。足を止め、冷たい夜気に身を凍らせ、彼は断ち切れぬ獣欲と戦っていた。そして、自分は何でこんなところをこんなことをしているの

だろうかという冷静な思いに至った。大事な参拝の旅だ。仲間たちも京のため、学び舎の名誉のためにがんばっている。自分がそれを汚してはいけない。何よりもこのことがばれたあとのが怖くなつた。

彼は大人しく引き返すことにした。

足音が聞こえてきたので彼は立ち止まった。辺りを見回す。風のいたずらだろうかと思つたが、闇の向こうにおぼろげながら何者かがいた。

八桐に近づいてくる。闇の中からその姿があらわになった。

そこには村娘がいた。八桐が目をつけた娘ではない。それよりもほんの少しだけ年上に見えた。長い髪を垂らしている。その目つきは驚いていない。女はなかなか美人だった。村娘という印象は受けない。その身なりはみすぼらしいが、女の顔立ちはそれなりに整い、美しい見事な身体つきをしていた。冷たく人を見下すような目厚ぼつたい赤い唇は八桐に何かを期待させた。

参拝仲間の三人には敵うまいが、なかなかの上玉だと八桐は心を躍らせた。

「村を助けてくれた人ですね」女が見た目通りの色気のある、どこか冷たい声を出した。

「そうだ。ちよつと眠れなくて村を歩いていたんだ。夜風が涼しいな」

「少し涼しすぎるくらいに」女は真夜中に外にいる不審な男にもまるで臆さずに八桐に近づいてきた。「村を助けて頂いてありがとうございます。確か私の妹を助けていただいてくれましたよね？」

妹。なるほど。少しだけ似てるような雰囲気があるような気がする。あの女の姉か。だが見る限り、性質はだいぶ違いそうだ。この女は間違いなく色女の性質がある。

「あの女の姉か。妹も美人だが、姉も美人だな」八桐は好色な目を向けつつも、女受けがいいとされる気取った顔つきを崩さなかった。「あのときは顔を見なかった。家にいたのか」

「いえ。村にはいませんでした。森の中にいましたから」女は謎めいた顔をした。

「男と一緒にだったのか」

「察しがいいですこと」女は何かをねだるような顔つきをして見せた。「山賊退治の見返りはもらえまして？」

「一晩の宿と旨い食事は手に入ったな」

「それだけですか？ 村の救い主なのに」女は少しだけ着物をはだけ、細い肩がのぞき、乳房の上半分が白く光って見えた。

「必要ならこの身体、慰めに使ってくれてもいいんですよ？」

八桐は唾を飲み込んだ。

女は上目遣いで蠱惑的な目つきをして見せた。「村娘の身体なんぞを所望するのであればの話ですが」

「願ってもない」

八桐は興奮を抑えつつも貪るように女の唇を奪った。離すと、かすかな吐息を漏らした。服を脱がせる。優しい脱がせ方ではなかったが、破かないように気を遣うだけで精一杯だった。見事な女の乳房を口に含み、そのまま押し倒した。

山賊の襲撃 五

浄瑠璃が起きるとすでに葵と百合桜の姿はなかった。また自分だけ寝坊をしてしまったのかと慌てて支度を調える。鏡に映る顔は酷いものだった。中途半端な髪はぼさぼさに四方八方に伸びている。すぐに水で顔を洗う。髪も整える。着替えをして準備を終えるところに家を出た。外には八桐以外全員揃っていた。

「おはようお寝坊さん」葵の挨拶に浄瑠璃もおはようと返す。

「よく眠ってたから起こさなかったの。可愛い寝息を立ててね。あれを起こすのは可哀想だっと思ってたの」百合桜が愛おしそうに浄瑠璃を見ながら微笑んでいる。

「随分好かれちゃったわね」葵が浄瑠璃の耳元で言う。「そっちの気があるんじゃないの？」

「葵もね」

「どういう意味よ」

「あたしのこと好きでしょ？」

二人は見つめあい、互いににやりとした。百合桜がそれを不思議そうに見つめた。

「後は八桐だけど、あいつなかなか起きそうもないぜ」夏彦が言う。しかし八桐は外に出てきた。眠そうな顔をしている。だいぶ寝たようだが疲労がぬぐいきれないのだろうと一同は思った。

「おはようございます」と初雁。

「おう」八桐は億劫そうに返した。

「平気か？」燈籠が確認する。

「大丈夫、眠いだけだ」

「もう出立すると村長や宿の主にはいつてある。起きてすぐになるけど、早いところ発とう」

空は雲に覆い尽くされていた。霧がかかっていて薄暗い中を彼らは歩いた。冷たい風が吹いているが、耐えられないことはなかった。

遅々と歩みながら確実に進んでいく彼らは最初の頃とは打って変わって旅人の雰囲気を身に纏っていた。足腰も鍛えられたのか、寝不足の矢桐とてすぐには音をあげなかった。一方浄瑠璃はすぐに音を上げてしまいがちだったが、他の連中が余裕な様子なので、少し無理をして頑張ることにした。自身の体力の無さを思うと情けないが、灯籠の背中を見ると頑張る気になれた。たまに振り返るその顔をみるだけで切ない思いに胸を焦がされる。

いつまでもこの気持ちは変わることがないのかもしれない。同時にこの距離も。それを思うと彼女の顔も歪む。

藤馬山の中腹まで着いたのは正午を過ぎ、日が最高まで上がったときだった。開けた場所で休憩を取る。

「延々と山道だな」矢桐はうんざりといった様子だ。

「もうすぐそれも終わりだ。だろ、灯籠？」夏彦は元気そうだった。「まあ……だけど油断できない。どこか嫌な感じだ」

不安。灯籠は自分の感覚を信用している。絶対的な信頼といつてもいい。そのことに対して猛烈な嫌悪感を抱くこともあるが、事実は事実で、よくないことが起こる、という予兆を覚えたときはほぼ確実に起きる。それが小さいことであれ、大きいことであれ。灯籠としてはそれが些細なことであることを願うが、不安は拭えなかった。何かは起こる。

灯籠のように予兆を感じているわけではないが、葵も吹く風に何らかの不吉を感じ取っていた。どこか、少し離れた場所で感じる敵意。狼の群れに襲われたときのことを思い出す。もう一度遭遇する気にはなれない。

もう少しだけ待とう。ただの錯覚かもしれない。

夏彦が足を止めた。

「変だろ」

葵は夏彦を見直した。意外と鋭いようだ。確かに、何者かの気配がする。それも一人ではない。

音桂はすでに弓を構えている。

全員が立ち止まって周囲を見回している。風の音による葉のざわめきが、他の音が消していた。

森の奥から放たれた矢が浄瑠璃にまっすぐ向かっていった。浄瑠璃の額を割ると思ったが、そうはならず、軽い衝撃音と共に矢は浄瑠璃の目の前で半分になって地面に落ちた。

葵はこの攻撃に怒り、すぐさま森の中に弓を放った。肉眼で確認したわけではないが、矢の放たれた位置から場所を推測したのだ。悲鳴が上がった。

木々の中から男たちが刀を持って飛び出てきた。

夏彦が男達の前に立ち、三人をまとめて相手にした。この中では一番腕が立つ夏彦は、野盗たちを切り捨て、さらに奥にいる敵に向かっていった。

燈籠はさすがにまずいと思った。敵の残党がどれほどいるのもわかっていないというのに。夏彦の行動は無謀だ。

音桂と葵も燈籠と同じに感じたようで、すぐに夏彦の背中を追い、彼を援護しようと弓を構えた。

「夏彦！」燈籠は野盗を一人斬り捨て、それから夏彦を見つけた。武士のように鎧と兜を装着した相手に夏彦はつばぜり合いをしていた。その手前には夏彦が斬ったのであろう、二人の野盗の死体が横たわっている。相手の力が勝っているのか、夏彦は押されていた。燈籠はすぐに助太刀をしようと鎧を着込んだ敵に向かっていくが、二人の野盗に阻まれ、彼らの相手をする事となった。

なにやら物音が聞こえた。夏彦のいるほうからだった。燈籠は焦る。二人の野盗の頭にはほぼ同時に矢が突き刺さった。野盗達は倒れ、そしてその先には鎧を着た野盗がいる。しかし、夏彦の姿はどこにも見えない。

鎧を着た野盗が死を覚悟して燈籠に挑んだ。剣圧は凄まじく、燈籠は押されるが、葵の薙刀が野盗の首を刺した。野盗は倒れ、絶命した。

辺りは静かになった。野盗は全滅したか、逃げたのか、いなくな

ったようだ。

燈籠はさつきまで夏彦がいた場所に向かう。夏彦が戦っていたのは崖になっていて、その先は深い森になっていた。崖の一部が崩れていた。

夏彦はここから落ちたのか？ 燈籠は辺りを見回す。夏彦の姿はない。ここから落ちて、助かるものなのだろうか？

そばに音桂がきた。

「どうしたんだ、夏彦はどこに？」

「ここから落ちたのかもしれない」

「なんですって？」 葵が駆けつける。

「こんなところから落ちたら助からないでしょう」 初雁が言う。

「でも……下は森でしょ。可能性はあるかもしれないわ」 百合桜が言った。

「どうやったらここから降りることができるだろうか」

燈籠の問いに音桂は首を振った。

「駄目だ。参拝の道と外れることになる。ここで俺たちが向かったなら神々の逆鱗に触れるかもしれない」

「じゃあ見捨てるっていうのか」 燈籠が荒い声を上げた。

「狼煙を上げて知らせよう。俺たちにできるのはそれまでだ」

燈籠は地面に尻を着いた。まさか、ここまできて仲間を一人失うことになるとは……。希望はあるかもしれないが、崖は高い。森の木々が、緩衝になればいいのだが。

夏彦は運のいい男だ。そんな簡単に死ぬとも思えない。燈籠はそう考え直す。そうだ、きつと無事である。狼煙を上げて、救出されるのを願おう。

最後の行程

狼煙を上げる。煙の色で状況を簡単にだが伝えることができる。今回の薄赤と黄色の混合色。仲間の救出を頼む意味になる。

再び歩を進める。一同の気は重い。仲間が一人欠けた。その事実が彼らを苦しめ、不安を増大させていた。

浄瑠璃は曲玉を顔に近づけた。先ほど光を放ち、曲玉は浄瑠璃を死の脅威から守ると再び光を失った。再び輝きを放つのは次の日になる。

夏彦が崖から落ちたのは実に痛ましいことだ。彼はこの旅の仲間の中でも陽気で面白く、何よりも燈籠と仲がよかった人物だから。

燈籠の背中はいつもとより小さく見えた。一番辛いのは燈籠なのだ。そんな彼なのに、今も率先して歩いている。彼の苦しみを消してあげたいが、今の浄瑠璃には何もできそうになかった。

役に立っていない自分に苛立つ。葵は弓で、百合桜は妖術で、それぞれ役立っている。しかし自分は、戦力外だ。守られる存在ではない。初雁も同じだとしても、浄瑠璃は悔しい。灯籠に守られるのは嬉しいことだが、守ってもあげたかった。戦いの中でも、そうだ。女だから、非力だからでは通用しない世界。強制とはいえ、それを覚悟でこれに挑んだのではなかっただろうか。

強い風が吹いた。浄瑠璃は寒さに震える。曲玉には風の冷たさすら軽減する力があるが、今は全く何もしてくれない。

だが今は一番、自分を解放できる時間ではないだろうか。浄瑠璃は考える。そうだ、今しかない。だが……浄瑠璃は首を振る。無理だ。そんなことをすれば、自分は自分でなくなるし、そして燈籠は自分のことを嫌うだろう。

いざとなったら。本当にいざとなったら。自分が、仲間を救えるだろう。それもこの曲玉が再び輝かないまでのことだが。

藤馬山を下山する頃にはすでに日が暮れ始めていて、彼らは予定の村で一泊することにした。村に赴くとすぐに彼らは歓迎され、小さな宿とはいえ熱い風呂それに暖かい料理があり、今日の旅の疲れを癒すことができた。誰も彼も疲れ切っていて、床につくとすぐに寝てしまった。燈籠だけが眠れず、夏彦のことを思いだしては悔やんでいた。だが彼も体の訴えには勝てず、真夜中を過ぎた頃にはうつうつと眠りについた。

半月が上がり、夜風が吹きささぶ、冷たい夜だった。

起きるとすでに日は煌々と照っている。燈籠たちは彼らからすると粗末な食事を摂ると、村人たちに見送られ、出立した。目指す阿高山はすぐ近く。山自体の標高も今までの山に比べたら低いもので、遅くとも今日の夕暮れには最終目的地まで到達するはずだった。

「燈籠、疲れてるな。歩き方でわかるぞ」

音桂が燈籠の背中を叩いた。

「大丈夫か？」

「まあ、最後だし。少しは無理もしますよ」

音桂は微笑んだ。

「俺たちはよくやったよ」

「まだその台詞は早いでしょ」

阿高山は山道が入り組んでいた。地図はあるが、山道は複雑だった。地理に長けた初雁に先頭を任せて一同は進んだ。

「もうすぐだ。もうすぐ山頂だよ」そう言う初雁の声は興奮しているようだった。

無理もないと燈籠は思う。自分もそうだ。この旅を終わらせることができ、晴れて帰校することができる。夏彦の安否は気がかりだが、旅の苦悩と苦労は終わるのだ。

「もう狼や野盗は勘弁だからな」矢桐が呟いた。

日は高くなり、短めの休憩時間を設けた。握り飯をほおぼると、再び歩く。

獣道のような道を進みながら、一同は初雁を信用して大丈夫かと

不安になったりもした。途中で野兔を追う狐を見つけた。兔はいい食料だが、今となつては必要なかつた。木々の向こうには水辺に鹿がいて、水を飲んでいるという光景を見ることができた。今までの山の中では一番のどかな山だと一同は思った。

穏やかな気持ちのまま、彼らはとうとう山頂まで登り詰めた。まだ正午からさほど過ぎていない時間だ。

山頂は平地になつていて、開けた場所に、大きな石像が何体も並んでいる。古代の神々を模造したそれらに囲まれたこの場所は霊的な力を放つていて、一度を緊張させた。

奥には小さな祠があつた。邪悪なる力を持つ神々が奉られている祠が。

その祠の前には八人の参拝人の姿があつた。

燈籠はその中に、見知つた顔を見つけた。その者は燈籠に気づくと笑みを浮かべて近付いてきた。

「やあ、燈籠じゃないか」

「霧窪………？」

終

音桂は眉をひそめた。燈籠と話しているのは霧窪だ。帝京の生徒で、妖術の技で有名なはずだ。向こうの生徒にも頼もしい術師がいたものだ。

彼らがここにいるということは、帝京に先を越されたということ。これは競争ではない。とにかく、三学舎のうちのどれか一つの組が参拝を終えれば、それでいいのだから。だが、自分達が遅れを取ったという事実は不満でもあった。あれだけ苦労したのに、一番乗りではなかった。これまでの戦いを思い出す。なんだか、全てが無意味だったみたいではないか。

「参拝を終えたのか？」燈籠が霧窪に尋ねた。

「ああ。たつた今ね。みんな、友人の燈籠だ。それから西京の生徒のみんな、僕は霧窪。帝京の生徒だ。なんだ、一人いないようだが」

「ああ、そのことはまた後にしよう」燈籠が力なく言う。

「わかった……まあ、旅は終わった。富嶽はほぼ絶望的だそうだ。道に迷って、極めて危険な状態にある。彼らはほぼ脱落のようだ。大丈夫、死者はいないよ。僕らは共に山を下りよう。ここから下山は浮石うつきいしがあるから大丈夫。あつという間に降りれる。そこから先は列車で一氣に京まで戻れるよ。待つてるからお参りすればいいよ。せつかくだしね」

燈籠たちは参りを済ませた。誰も口には出さなかったが、この場からは強烈な邪気が感じられた。あまり長居はしたくなかった。今にも何かの罰によってよからぬことが起こり得りそうで、そそくさとその場を離れ、浮石を使って阿高山を離れた。

列車の前には京学の学長と副学長がいて、彼らを待っていた。

「あなたたちは素晴らしいことを成し遂げたのですよ！」副学長は

彼らを抱きしめんばかりに喜び、学長は涙を浮かべていた。

「夏彦は無事です。森の中で彼を見つけました。傷ついているはずが、木が衝撃を和らげてくれたようですね。崖から落ちてあの程度で済んだのは僥倖でしたよ」

この知らせには全員が喜んだ。燈籠はほっと胸をなで下ろし、それからやはり不安だったのだろう。しこりが取れたように緊張が消えていくのを感じた。

「やれやれ、僕らにはお迎えもないようだよ」霧窪は嘆息した。

列車の中ではほとんどが眠っていた。燈籠と浄瑠璃だけが起きていた。葵も眠っていた。葵は燈籠たちから離れたところで眠っていた。彼女は結局この旅で浄瑠璃の恋が進展しないのは、自分や周りの連中が邪魔をしているからだと思っていた。燈籠と浄瑠璃が二人きりになれば、きつと親密になり、この恋は成就するだろう。

せつかく苦労した旅だ。淡い恋を実らせるくらいことは神もやってくれていいはずだ。

葵は浄瑠璃の幸運を祈りつつ、眠った。彼女も疲れていて、あどけない少女のように深い眠りについた。

列車は彼らのことを気遣っているかのように、ゆったりと走っていた。

燈籠と浄瑠璃は隣同士で座っていた。

浄瑠璃はやはり緊張していた。こんなにも近いとは。しかも燈籠はまだ起きていて、どこかこちらと話をしてみたいように思えた。

「あのさ」

燈籠が話しかけてきて、浄瑠璃は体を竦めた。

「は、はい」

「君にはその翡翠の曲玉があつてよかつたよ」

浄瑠璃は曲玉を持ち上げる。鈍い光を放っている。力が戻ったのだ。安心するべきか、鬱陶しく思うべきなのかわからない。

「だってそれのおかげで君は矢によって危ういところを救われたわ

けだし。あのときは本当にひやりとしたよ。そんないい曲玉は、大事にしたほうがいい」

「これは私の体から離れませんよ」

「本当？」

「ええ。そういう呪いです。これは私の体を守る代わりに、私を束縛します。私にとってこれは……叔母上なんです」

「叔母上」燈籠は眉をひそめる。

浄瑠璃はくすりと笑う。燈籠には理解できないだろう。

「叔母上はすでに他界しています。叔母上は亡くなるまえに私のためにこれを作ったのです。日頃からうるさい叔母上のことです。死んでからも私を縛りたかつたんですね」

燈籠は彼女がしんみりした顔になっていることに気づき、戸惑いの色を浮かべた。曲玉の力は彼女にとっていいように思えるが、彼女はそれを疎んじているように見える。深くは追求しないが、興味はある。

「君の水晶球はもう使えるんだろ？ せっかくの縁だし、俺の水晶球と会話ができるようにしようよ。ここにいる仲間とはまた会いたくなるだろうしね」

浄瑠璃にとつては願ってもないことなので、互いの水晶球を合わせ、互いに会話ができるようにした。これで、離れていても水晶を通して会話ができるようになった。

だがそんな機会があるだろうか。浄瑠璃は自嘲する。きっと今のままでは、燈籠は自分のことを忘れてしまう。

これが最後の機会なのかもしれない。

「燈籠殿……」

「野盗のときはさ、君のおかげで考えられされた」

燈籠が言ったことが浄瑠璃には理解できない。

「君があるとき非難の目を向けた。だから俺は人を初めて斬って殺したということをよく考えた。殺生というのは重い行為だ」

「燈籠殿はそのことをよくわかる人だということを知っています」

「そう？ 俺のことなんてわかるかな。自分でもよくわからないのに」

「見ているから。だから、わかるんです」

二人の視線が合い、目は互いしか見なかった。

しかし長い間ではなかった。お互い妙に意識して、目をそらしたのだ。

「まあ、もう人も魔物も斬るなんて機会はごめんだね。この冒険で一生分であればいい」

「そうですね。これからのほうがより冒険ですからね」

「それは学舎を出てからのことかい？ あまり考えたくないことだけど、そうだなあ。確かに、冒険だ。だけど、あまり興味がない」

燈籠は浄瑠璃の手を握った。

浄瑠璃は顔を赤らめた。

なんで手なんか握ったのだろうと燈籠は考える。これからのことを考えると気が重くなって、つい握ってしまった。しかし、不思議と心地よい気分だった。華奢な手は温かく、その手は常に誰かによって包んでやるべきなのかも思ってしまう。

「まあ、こうして仲間と手を取り合って歩む機会は失われていくかもしれないね」

少し無理があったかもしれないと燈籠は思いつつ手を離れた。

「燈籠殿は未来に希望を持っていいはずですよ。より輝くはずですよ」

この娘は、と燈籠は微笑む。そうか、自分に好意をよせてくれているのか。旅の道程で男女が一緒になるのはありえそうだと思っただが。だがああいった境遇での恋というのは信じてたるものなんだろうか。

答えは、学舎でわかるよ。

「ありがとう。未来に絶望はしないよ。ただ少し憂鬱なんだ。少し寝るよ。君も……浄瑠璃も寝たらいい。もう辛い旅は終わったんだ。きつとよく眠れるから」

終（後書き）

終わりです。でも続きます。次は学園編ですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4993z/>

参拝の旅

2011年12月18日03時07分発行